

平安京左京三条三坊十五町

—ニチコン株式会社本社新築に伴う調査—

2004年

古代文化調査会

序

本報告は、京都市中京区御池東洞院西入仲保利町におけるニチコン本社新築に伴い2003年5月から9月にかけて実施した平安京左京三条三坊十五町跡の発掘調査をまとめたものである。

当地は、平安時代から鎌倉時代にかけて里内裏や院の御所が幾度となく置かれた由緒ある土地柄である。

調査においては、鎌倉時代の立派な石組みの堰をもつ庭園遺構が出土したが、これは後嵯峨・後深草・龜山各上皇三代にわたって営まれた三条坊門押小路殿の御所に造られた庭園の一部である可能性がきわめて高いものである。なかでも石組みの堰は、これまでの平安京跡の調査で初めて明らかとなったものであり、当時の庭園における造水の排水構造を知る重要な発見である。

また、中世墓の中にも、身分の高い被葬者をうかがわせる鏡や青磁碗・白磁碗などの貴重な副葬品をもつものがあり、平安京跡では実に希な出土例となった。

江戸時代の層からは慶長拾年（1605）の紀年銘墨書き土器とともに天秤の鋳型が多量に出土したが、これは江戸時代前期の京都案内記である『京羽二重』の中に、当地には天秤製造をおこなっていた中堀氏が居たとする記述があり、それを裏付けるものである。それはまた、現在の町名「仲保利町」にその名を今日に伝えていることからも確かなものである。天秤工房跡の発見は国内で初めてであり、我が国における江戸時代の天秤作りの始まりを知る重要な手がかりとなるものである。

以上、今回の調査においては各時代にわたって画期的な発見が相次ぎ、今後の調査研究に大いに寄与する資料が得られたものと確信する。

本報告書が諸方面で利用されることを期待するとともに、調査に協力された各位に心から深甚の謝意を表して、もって序文とする。

2004年6月

古代文化調査会顧問・京都産業大学教授
井 上 満 郎

例　　言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区御池通東洞院西入仲保利町において、ニチコン株式会社による本社新築に伴い実施した平安京左京三条三坊十五町跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、ニチコン株式会社より委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市埋蔵文化財調査センターの指導を受けた。
4. 本書の編集は家崎がおこなった。
5. 遺物の観察には上村憲章の協力を得た。図面及び遺物整理は、上垣雅子、須貝淑恵、山口由希子、渋谷　梓、小原信利が分担し、遺物の実測を上垣、須貝がおこなった。
6. 本書の執筆分担は次の通りである。

I・II・III・V 家崎 IV 上村 家崎
7. 本書で使用した方位及び座標の数値は平面直角座標系VIによる。記載した数値はm単位で、水準はT.P.である。
8. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図（三条大橋）を調整し、使用した。
9. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
10. 遺物番号は実測図・拓本・写真ともに共通している。
11. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤坂 博 石田志朗 猪熊兼勝 今江秀史 岩田重雄 上村和直 馬瀬智光
岡田文男 梶川敏夫 加藤俊吾 河角龍典 北崎仁志 北田栄造 高 正龍
小玉正美 小森俊寛 坂井秀弥 鈴木久男 高橋 潔 玉村登志夫 長谷川行孝
広瀬淑彦 堀 大輔 宮原健吾 宮本佐知子 村井伸也 百瀬正恒 森 健
森 正 山下喜吉 山田滋也 横川義和

（株）明輝建設 （株）大高建設 （財）京都市埋蔵文化財研究所
(有)京都編集工房 (株)久米設計 ニチコン (株)

本文目次

平安京左京三条三坊十五町

I 調査の経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺 跡	3
IV 遺 物	6
V 考 察	21

図版目次

図版1 遺跡 第1面・第2面遺構実測図	
図版2 遺跡 1 第2面全景（北から）	
2 第2面全景（北西から）	
図版3 遺跡 1 第1面Ⅰ期全景（北東から）	
2 土壙102（東から）	
図版4 遺跡 1 第2面全景（北西から）	
2 墓1・2（北から）	
図版5 遺跡 1 第1面Ⅱ期全景（北西から）	
2 第1面Ⅰ期全景（北東から）	
図版6 遺跡 1 調査地遠景（北から）	
2 池306（北東から）	
3 墓1・2（北から）	
4 池403北壁断面（南から）	
5 北拡張区中央部（北から）	
6 北拡張区西部（北から）	
7 土壙527（南から）	
8 土壙526（北から）	

- 図版7 遺跡 1 土壙381・382（北東から）
 　　2 土壙382・381（西から）
 　　3 土壙320（東から）
 　　4 土壙314（南西から）
 　　5 土壙414（南から）
 　　6 土壙02・04・26・102（北東から）
 　　7 土壙02・161・26（西から）
 　　8 柱穴30（南から）
- 図版8 遺物 1 木瓜鑄型
 　　2 土壙04出土「慶長拾年」紀年銘墨書土器
- 図版9 遺物 1 土壙04出土銅製天秤具
 　　2 土壙04出土天秤皿
- 図版10 遺物 土壙102出土遺物
- 図版11 遺物 土壙382・04・151・342・池306出土遺物
- 図版12 遺物 池403・306出土遺物

挿 図 目 次

図1 調査地位置図	1
図2 平安京条坊と調査地位置図	2
図3 四行八門と調査位置関係図	2
図4 調査区北壁断面図	3
図5 堀1・堀2東西セクション断面図	4
図6 土壙381・382実測図	4
図7 土壙414実測図	5
図8 土壙102実測図	5
図9 土壙04断面図	5
図10 池403・306出土遺物実測図	7
図11 池403出土染付碗実測図	8
図12 土壙414出土遺物実測図	8
図13 土壙102出土遺物実測図	9
図14 土壙04出土遺物実測図	10
図15 土壙04出土遺物実測図	11

図16 土壙04出土遺物実測図	12
図17 土壙04出土遺物実測図	13
図18 土壙04出土土師器皿の口径分布図	14
図19 土壙102・382出土鏡拓影・実測図	15
図20 土壙102出土錢貨拓影図	15
図21 天秤模式図	16
図22 土壙04・161出土金属製品・骨角製品実測図	16
図23 木瓜鑄型実測図	17
図24 土製品実測図	18
図25 池403・306出土軒瓦拓影・実測図	20
図26 「仲保利町」位置図	23
図27 明治17年地籍図	23
図28 土壙04出土棒秤概略図	24

表 目 次

表1 土壙102出土錢貨計測値一覧表	15
表2 遺物観察表	27

平安京左京三条三坊十五町

I 調査の経緯

調査地は、京都市中京区御池通東洞院西入仲保利町174番地他である。当該地は周知の遺跡・平安京跡の左京三条三坊十五町に比定されているところである。2001年5月、当地においてニチコン株式会社による本社建設の計画がなされた。建設工事によって遺跡が破壊されるおそれがあるため、京都市埋蔵文化財調査センターは工事に先立ち試掘調査を2001年5月21日に実施した。調査の結果、地表下2mにおいて平安時代末から室町時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。その後当地の建設計画が延期され、2002年9月になり京都市埋蔵文化財調査センターより当調査会に発掘調査の紹介があり、センターの指導の下、施主であるニチコン株式会社と協議を行った結果、2003年5月より当調査会が発掘調査を行うこととなった。

II 調査の経過

平安京左京三条三坊十五町にあたるこの地は、北側が押小路、南側が三条坊門小路、東側が東洞院大路、西側が烏丸小路に囲まれたところである。調査地はその十五町の三条坊門小路に接する南辺部に位置する。

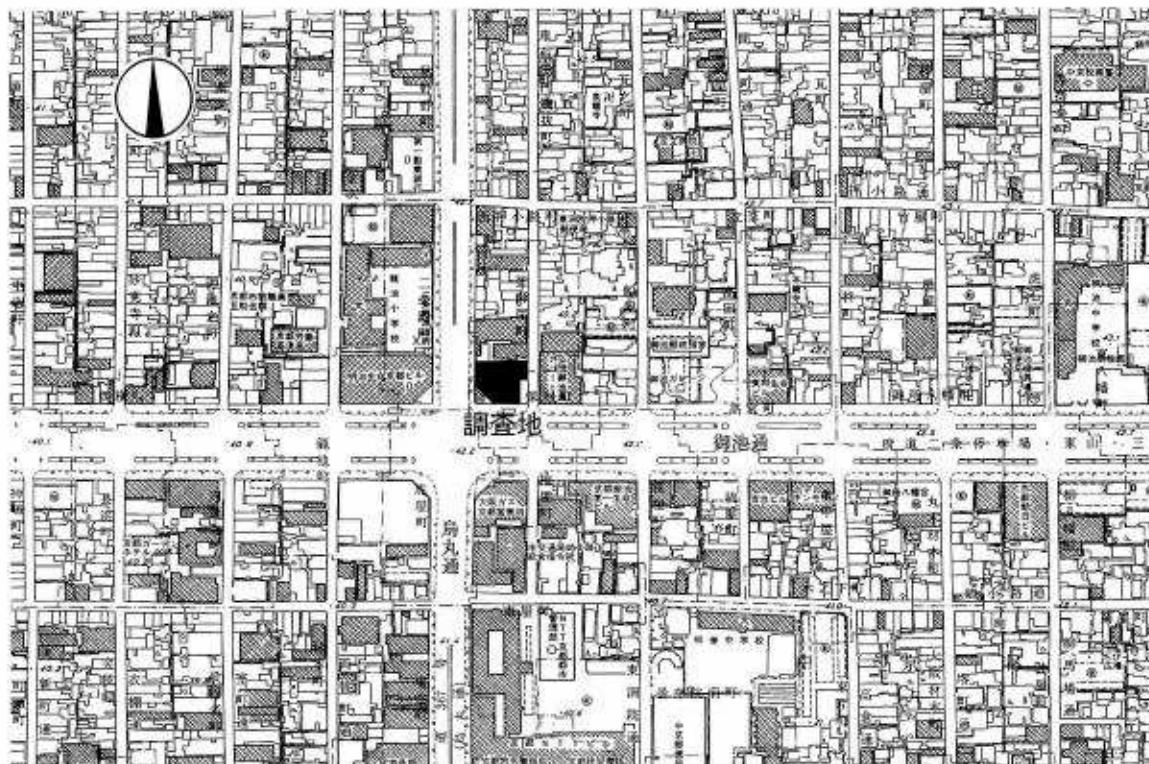


図1 調査地位置図 (1/5000)

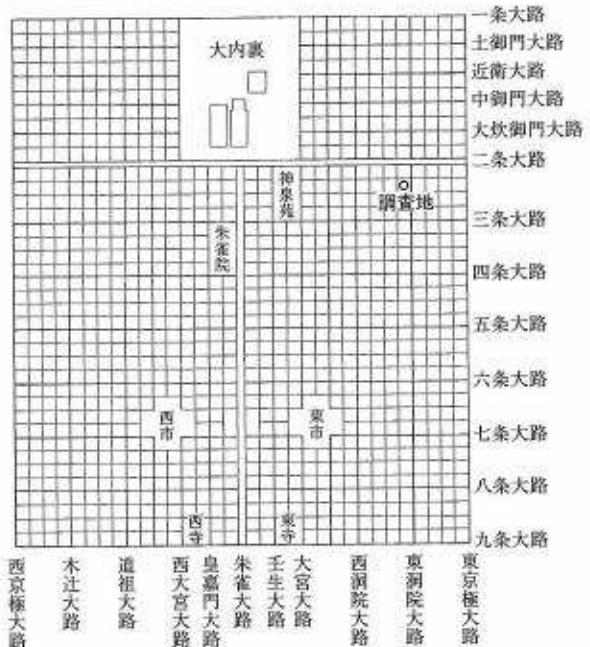


図2 平安京条坊と調査位置位置図

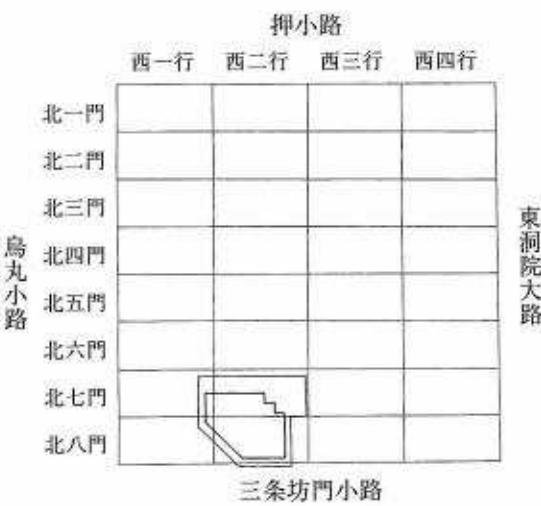


図3 四行八門と調査位置関係図 (1/2400)

文献史料からは、この町は平安時代中期には左京大夫源泰清の邸宅を借り受けた資子内親王邸があった（權記、長保2年8月17日条）。その後、上野介藤原定輔が三条天皇にこの地を献じた（小右記、長和4年8月27日条）。三条天皇は譲位後、当地に「三条院」を設けた（御堂関白記、長和4年11月9日条）。平安時代末期には二条天皇の「押小路東洞院内裏」が置かれ（百鍊抄、応保2年3月28日条）、鎌倉時代には後嵯峨・後深草・龜山各上皇の「三条坊門押小路殿」が管轄されたとされているところである。^{註1}調査にあたっては、平安時代の文献史料に留意するとともに、当該地は弥生から古墳時代の集落跡・烏丸御池遺跡に含まれるところでもあり、平安京以前の遺跡の存在を想定して調査を行うこととした。実際の調査においては、場内に土置き場を確保するため、北側の一部を拡張区として二段構えで調査を行った。試掘調査の結果を踏まえて地表下2mまでの江戸時代以降の土砂を機械力によって除去した後、以下調査に着手した。中世の包含層は一部島状に残存していたものの、調査地全域においては近世層が地山直上まで達していた。第1面は3時期の調査を行い、中世の包含層を除去した後の第2面は2時期の調査を行った。およそ第1面は室町時代から江戸時代、第2面は平安時代から鎌倉時代である。

発掘調査は、2003年5月10日から同年9月10日までの79日間実施した。調査面積は約460m²であった。

なお、調査の方法については、平面直角座標系VIによる平安京の復原モデルを使用し、調査区の北東角(X-110,008、Y-21,632)を原点とする、東西方向にローマ数字を、南北方向にアルファベットを記号として付し、4mグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法を行った。

III 遺 跡

基本層序は、地表下2mの地山近くまで江戸時代以降の土層が及んでおり、調査区の北部及び南西部・南東部の一部に室町時代の包含層が認められた。また調査区全域にわたって鎌倉時代の苑池を埋め立てた整地層があり、その一部は地山と見間違う程の土層であった。基盤層は聚楽土といわれる黄褐色砂泥層である。

遺構には平安時代から江戸時代までのものがあり、遺構の総数は545基であった。遺構としては、井戸、土壙、庭園遺構、溝、堰、掘立柱跡などがある。以下主要な遺構についてその概略を述べる。

平安時代から鎌倉時代

土壙、庭園遺構、堰、掘立柱跡などがある。

土壙527（図版1・6の5と7）

北拡張区で検出したもので、長径1m、短径0.5m、深さ0.4mの楕円形に近い不定形の掘形をもつ。掘形内からは完形品の土師器皿が十数枚出土した。何らかの祭祀に伴う遺構とみられる。土器編年^{註3}のV期に属する。

土壙526（図版1・6の5と8）

土壙527の西側2mに位置する。長径0.65m、短径0.55mの楕円形の掘形をもち、深さ0.3mを測る。完形の土師器皿を数枚含む。VII期に属する。

池403・306（図5・図版1・2・4・6の2～4）

調査区全域にわたって平安時代末期から鎌倉時代の遺物を含む庭園遺構である。調査区の北端部から幅4～5m、深さ1m程の規模をもち、川状に南流する。南端部では二つに分流し三条坊門小路の築地おそらく暗渠となって排出する状況を呈する。石組みの堰が2カ所設けられており、北側の堰1は早い時期に、あるいは当初から設置されており、南側の堰2は時期を隔てて構築されていることが堆積土の状況からうかがえる。堰1は乱石積みで2・3段に築成する。堰2は北側に面を揃え一段のみで築成する。北方向から流れてきた水流が、堰1の前面で東西にオ

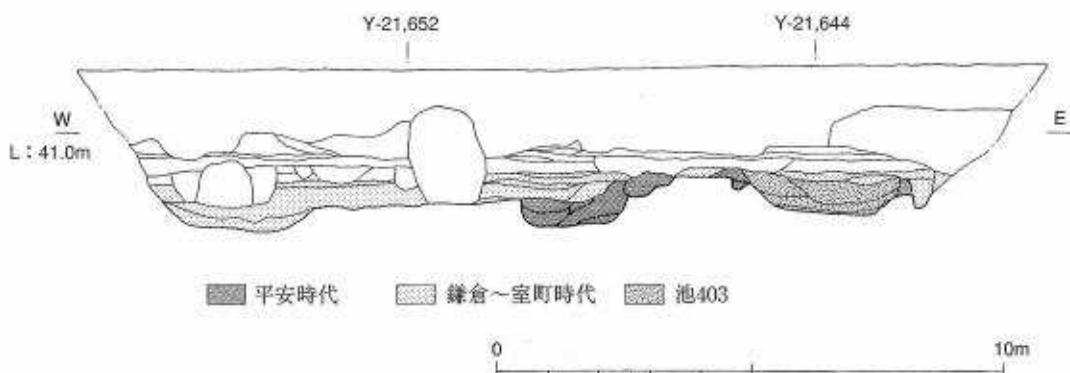


図4 調査区北壁断面図 (1/150)

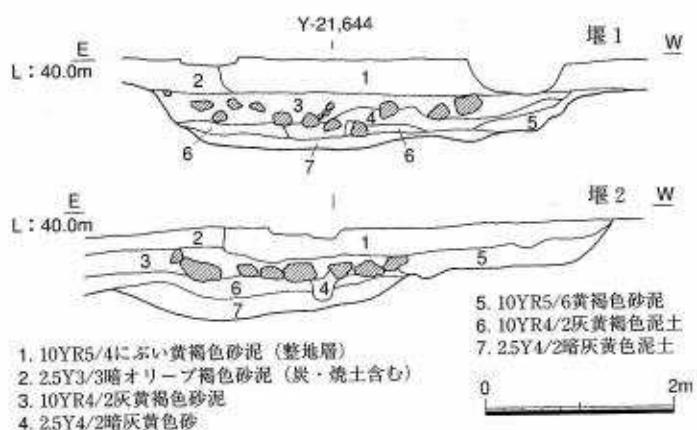


図5 堀1・堀2東西セクション断面図 (1/80)

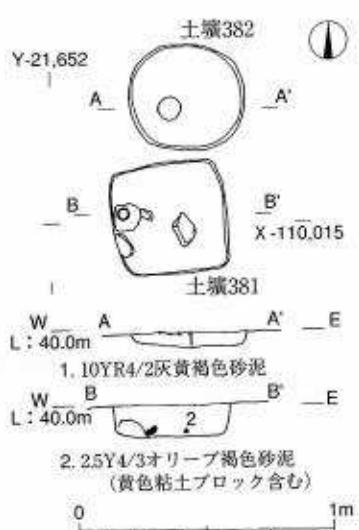


図6 土壙381・382
実測図 (1/30)

バーフローした状況がうかがえ、東側では水流によって肩部がえぐられ池の広がりが認められる。一方、西側では池306を形成する。池306は多量の瓦で埋め立てられており、それらの瓦は二次焼成を受けいずれも赤変している。池底は全域にわたって厚さ0.2m程の泥土層が堆積しており、部分的には土器溜りがみられる。池が廃絶さ

れた後、堀1と堀2の間、東西5.5m、南北3mの長方形の部分は厚さ0.3m前後の黄褐色砂泥層（地山に酷似する）によって丁寧に埋め立てられている。

土壙381・382（図6・図版1・2の1・4の1・7の1と2）

池306の北東肩部に位置する。土壙381は一辺0.45mの方形の掘形をもち、深さ0.13mを測る。埋土は地山に近い黄褐色土で、周辺の土色より際だった違いを見せる。掘形内には漆椀を一個体、西寄りに伏せた状態で出土した。その北側に接するように径0.45mの円形の掘形をもつ土壙382がある。掘形内より鏡面を上にした銅鏡が一面出土した。埋土は土壙381とは違ひ周りの土層に近い土色を呈する。いずれの土壙からもそれ以外の遺物を入れた痕跡は認められなかった。地鎮めなどの祭祀に伴う埋納遺構と考えられる。

室町時代

土壙、溝、掘立柱跡などがある。

土壙414（図7・図版1・2・4の1・7の5）

調査区の北部に位置する。南北長0.6m、東西長0.45mの楕円形の掘形をもち、深さは0.3mを測る。掘形内からは、完形品の土師器皿とともに多量の焼土と人骨片が出土した。おそらく、近辺で火葬を行った後、供養の土器とともに穴を掘り埋納したものと考えられる。

土壙314・320・322（図版1・2・4の1・7の3と4）

調査区東部に位置する。土壙314は南北長0.9m、東西長0.7m以上で、西半部が近世の土壙により削平されている。残存深0.4m程で、人骨とみられる骨片が一部残存する。錢縉の銅錢が20枚出土した。土壙320は南北長1m、東西長0.7mほどの楕円形に近い掘形をもつ。深さ0.5mを測る。人骨とともに歯の一部が残存する。土壙314の西側1mにある土壙322は南北長0.9m、東西長0.6m

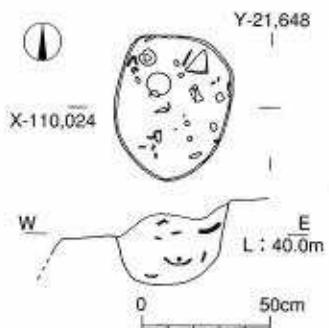


図7 土壙414
実測図 (1/30)

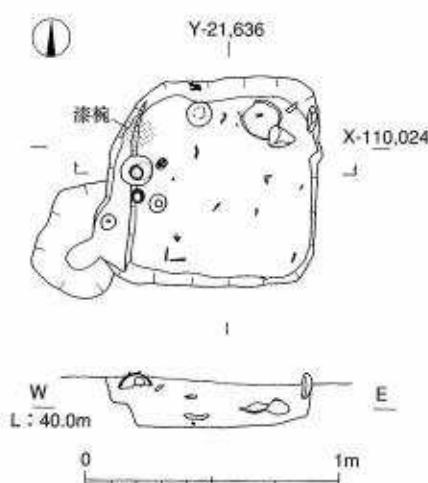


図8 土壙102実測図 (1/30)

以上、深さ0.4mを測る。両端が江戸時代の遺構で削平を受ける。歯の一部が残る。いずれの土壙からも土器類は小片のみ出土し、また、釘などの出土もなく木棺の痕跡なども認められなかった。IX期に属する。

土壙102 (図8・図版1・3・5の2・7の6)

調査区の南東部に位置する。一辺0.8mの方形の掘形をもち、深さ0.25mを測る。掘形内には、西寄りに青磁碗、白磁小碗、香炉、土師器皿2個体、錢縉の銅錢10枚、径5mm程の扁平な黒石、漆椀、銅鏡1枚などが出土した。掘形の北東部に頭蓋骨とみられる骨片が残存する。銅鏡は鏡面を上にし、その上に漆小椀を置き、青磁碗で蓋をするような状態で出土した。鉄釘が多く出土しており、木棺墓とみられる。

土壙48 (図版1・3の1・5の2)

調査区南辺部に位置する集石遺構である。東西長2.6m、南北長1.5mの椭円形に近い比較的大きな掘形をもち、深さ0.5mを測る。掘形内上部に拳大から径0.2m程の石を多量に入れる。埋土には土器類や瓦の破片を含むが他に顕著なものはない。IX期に属する。

土壙39 (図版1・3の1・5の2)

調査区北東部に位置する集石遺構である。南北長2m、東西長0.8mの長方形の掘形をもち、深さ0.3mを測る。0.2m程の石を掘り底まで充填する。遺構の軸は、真北に近い。少量の土器類が出土したが、性格は不明である。X期に属する。

江戸時代

土壙、井戸、掘立柱跡などがある。

土壙04 (図9・図版1・3の1・5の2・7の6)



図9 土壙04断面図 (1/80)

調査区の南東部、土壙102の西側1m程のところに位置する。南北長2.5m、東西長1.8mの椭円形の掘形をもち、深さ1.5mを測る。底に平らな石を4個南北方向に並べる。埋土は、上から砂礫層、炭層、泥土層、泥土層の4層に分層できる。下部の2層は石の現出面より上と下に分層したもので基本的には同じである。掘形内からは多量の土器類とともに、鋳型、堺堀、銅製品等が出土し

た。最下層より出土した土器類のなかには、「慶長拾年」(1605)と墨書した紀年銘土器がある。

土壤02・26・161 (図版1・3の1・5・7の6と7)

土壤04の南に接するように東西長2.7m、南北長3m、深さ0.5mの土壤02（石室）があり、その中央に土壤26・161がある。土壤26は東西長1.7m、南北長0.7mの長方形状の掘形をもち、深さ0.9mを測る。土壤161は土壤26に切られている。土壤161は東西長1.9m、南北長1.2mの隅丸長方形の掘形をもち、深さ0.9mを測る。3基ともに同一遺構の可能性がある。土壤26・161からは炭混じりの埋土から多量の木瓜鋳型や埴堀、銅製品などが出土した。

土壤151 (図版1・3の1・5の2)

調査区の中央部西寄りに位置する。東西長及び南北長ともに6m程で不定型な掘形をもち、深さは0.5m程で底は凸凹の状況を呈する。埋土は炭を多く含み、木瓜鋳型や埴堀、多くの完形品の土師器皿に混じって漆椀が数点出土している。

土壤75 (図版1・3の1・5)

調査区の南西に位置し、江戸末期の井戸に南辺部が破壊されている。東西長1.95m、南北長2m以上の方形の掘形をもち、底は二段になっており、浅いところは深さ1.4m、深いところは2.2mを測る。掘形上部は幅0.3m程の横板を杭で支持して土留めがなされている。最下部の中央には陶器の擂鉢を一個体据える。廁遺構の可能性がある。

土壤38 (図版1・3の1・5の2)

調査区北部土壤39の西側に位置する。東西長1.8m、南北長0.7m程で、長方形に近い掘形をもち、深さ0.25mを測る。木片などは認められなかったが、鉄釘が多く出土しており、掘形はほぼ垂直に掘られ、底も平坦なことから、木棺を据えたものと想定できる。

堀01 (図版1・3の1・5の2・7の8)

東西14間以上、南北2間以上のL字形の掘立柱の堀跡である。1間1.2mの4尺等間で、数回の作り替えがある。柱穴は径0.5m前後の円形で、掘形の底にすべて根石をもつ。

IV 遺 物

出土遺物は整理箱に171箱ある。時代は平安時代から江戸時代のものがある。遺物の種類には土師器、須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、金属製品、木製品、石製品、骨角製品、錢貨などがある。以下主要なものについて述べる。

土器・陶磁器類

池403出土土器 (図10・11)

土師器、瓦器、白色土器、須恵器（東海地方産）、輸入陶磁器などがある。

土師器は皿Acl~12、皿Nの小型13~31、同大型32~37、皿Sh38、皿S小型39、同中型40、同大型41~45があり、他にミニチュアの羽釜48・49、羽釜50がある。瓦器には小型の鉢51、小型の杯52、鍋53~55、羽釜56~57、白色土器には皿46・47、須恵器には小型の杯58、台付きの瓶59、

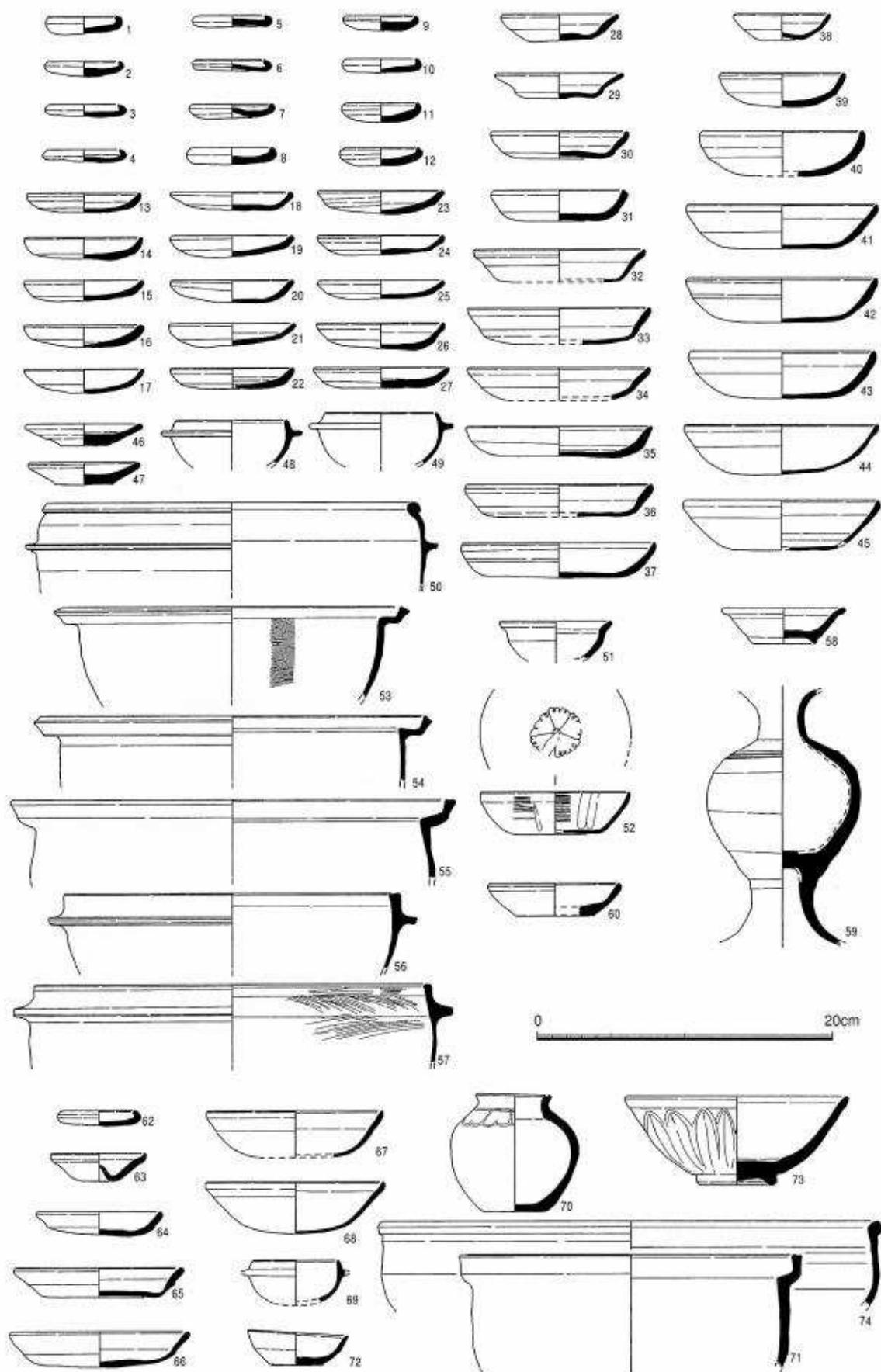


図10 池403 (1~60)・池306 (62~74) 出土遺物実測図 (1/4)

輸入陶磁器には白磁皿60、染付磁器の碗61がある。

土師器皿類の出土状況は、皿Nの小型は8cm台、皿N大型は12cm台が主流と判断されⅦ期古に比定できる一群が多くを占める。小型で9cmを越えるものと大型で13cm台のものはⅥ期中の古手のもの、また皿N28・29と皿Sの44・45は形態的にⅦ期新からⅧ期古に比定でき、時間的に新しい要素も少量見られる。これは池の形成のされ方、変遷、埋まり方（廃棄の状態）に関係するものと考えられる。また皿Acが多量に出土していることも際立った特徴となっている。瓦器の小型杯52は体部にミガキを施し五輪花に仕上げ、見込み部分に花形の暗文を配す。須恵器杯58は断面三角形の小さな高台を貼り付け、降下軸がかかる。59は高い台を付けた瓶で肩部に三筋の線が巡る。口縁、高台端部は欠失している。須恵器はいずれも東海地方の製品と見られる。

また、図11に示した染付磁器碗61は中国産で、Ⅶ期新からⅧ期古の一群（28、29、45）に伴って出土したものである。元代のものとするには類例がなく形態的にも問題があるが、堰1と堰2の間の整地層下より出土したもので、単純な混入品とは考えにくく、ここでは一応元代のものであるかどうか判断を留保しておく。その他に輸入陶磁器としては、青磁碗、口禿の白磁皿などの小片が出土している。

池306出土土器（図10）

土師器には皿Ac62、皿Nの小型64、同大型65・66、皿Sh63、皿S67・68があり、ミニチュア羽釜69も出土している。瓦器には肩部に蓮弁風の暗文を施した壺70、鍋71がある。須恵器には底部に糸切痕を残し高台を付けない小型の杯72があり降下軸がかかる。東海地方産と見られる。輸入陶磁器には青磁蓮弁文碗73、緑釉盤74がある。この遺構は池403とほぼ同時期に廃絶していて、出土遺物も同様の傾向にあるが、土師器皿Sh63、同S68は形態的にやや新しくなる可能性が高い。

土壤414出土土器（図12）

土師器皿Nの小型のもの75～81、同皿Sの小型の82・83がある。それぞれに大型のセットを欠落した資料で、Ⅷ期中に位置づけられる遺物群と考えられる。すべての個体が二次的な火を受けており変色が著しい。

土壤102出土土器（図13・図版10）

土器類の他に銅鏡一面、銅錢、漆碗などがある。土師器皿Sh84は内面に7カ所朱書きを施す。笹状の模様に見えるが、おそらくまじないであろう。皿N85は口径10cm、器高2cmを測る。胎土には白色微砂粒を多く含む。86は瀬戸香炉である。底部外面は回転糸切り痕が残り、小さな三足が付く。香炉内には灰が入ったま

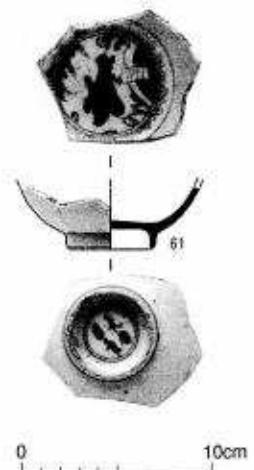


図11 池403出土
染付碗実測図（1/4）

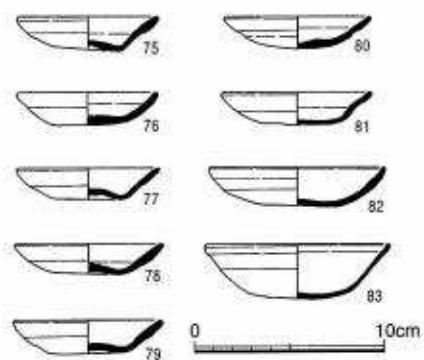


図12 土壌414出土遺物
実測図（1/4）

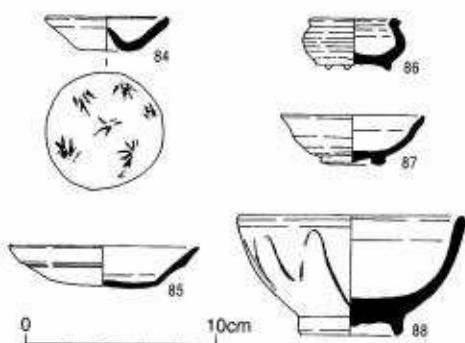


図13 土壌102出土遺物実測図 (1/4)

まの状態である。白磁小碗87は口径7.3cm、器高2.6cmを測る。灰白色の釉薬を浸け掛けする。体部下半部以下は無釉である。内面にのり状の有機物の付着が認められる。青磁碗88は蓮弁文を施す。口径11.7cm、器高6.3cmを測る。釉薬はオリーブ灰色を呈し、釉は高台までかかり、外底は釉薬を削り取る。白磁小碗と同様に有機物の付着が認められる。土器類はいずれも完品である。

土壤04出土土器 (図14~18・図版8の2)

土師器、瓦器、焼締陶器、唐津系陶器、美濃瀬戸系陶器、輸入染付磁器などがあり、第1層、第2層（炭層）を単位とする一群とその下層の第3層、4層を中心とするものに分けることができる。ここではそれぞれ上層（図14・15）、下層（図16・17）として報告する。

上層 土師器は皿Nr89~106、皿Sb107~115、皿S 116~131、小壺132~140、塩壺蓋141、塩壺身142・143、壺蓋144、焙烙鍋145・146、椀147などがある。皿Nrは小型89~102と大型103~106の一群が認められる。110~112、115、117、119、127は被熱によるものと思われる器体の黒化が見られ、109、116、122、125、126の口縁部には灯芯痕が認められる。焙烙鍋には口縁が玉縁状で体部から底部外面をヘラ削りするもの145と、型作りのもの146がある。145は内外面とも炭素は付着せず、火にかけて使用した痕跡は認められない。146は外面に煤が付着する。147は椀で一部が明黄褐色（10YR7/6）に変色する。瓦器は瓦灯149・150が出土している。149は燈火皿の受け部分で、150は外面にミガキが施されている。148は土製品の鉢である。国産陶器には唐津系陶器の蓋151、皿152、小椀153・154、椀155~158、美濃瀬戸系陶器の天目茶椀163~173、白天目茶椀182・183、鉄釉椀174~177、長石釉椀178・179・181、灰釉椀180、鉄釉小壺184・185、灰釉折縁皿186、灰釉丸皿187、長石釉皿188、鉄釉ミニチュア播鉢189、鉄釉鉢190・191などが出土している。焼締陶器は信楽産の播鉢161と器形不明160、丹波産の盤162がある。160は口縁部周辺に灰釉が施され、161は小さな片口をもつ。162は体部内面に重焼の痕跡が残る。染付磁器には碗192~201、皿202・203、鉢204があり、白磁には小碗205、皿206がある。これらの磁器類は中国産のものである。

下層 土師器は皿Nr207~225、皿Sb226~233、皿S234~243、塩壺蓋244~247、塩壺身248~250、焙烙鍋251がある。皿Nrは小型207~219と大型220~225の一群が認められる。226~230、233、238、242・243は被熱によるものと思われる器体の黒化が見られ、231、235、240・241の口縁部には灯芯痕が認められる。252~258は瓦器で、瓦灯の252の底部外面（高台内）には「九月吉日 慶長拾年 甚右衛〈花押〉」の墨書が認められる。甚右衛は甚右衛門の省略形。体部外面はミガキがある。253・254は瓦灯蓋のつまみ部分で、中央部には小さな穴が穿たれている。255は香炉で体部外面はミガキがあり中央部に菊花のスタンプを巡らし、底部側縁に三足が付く。

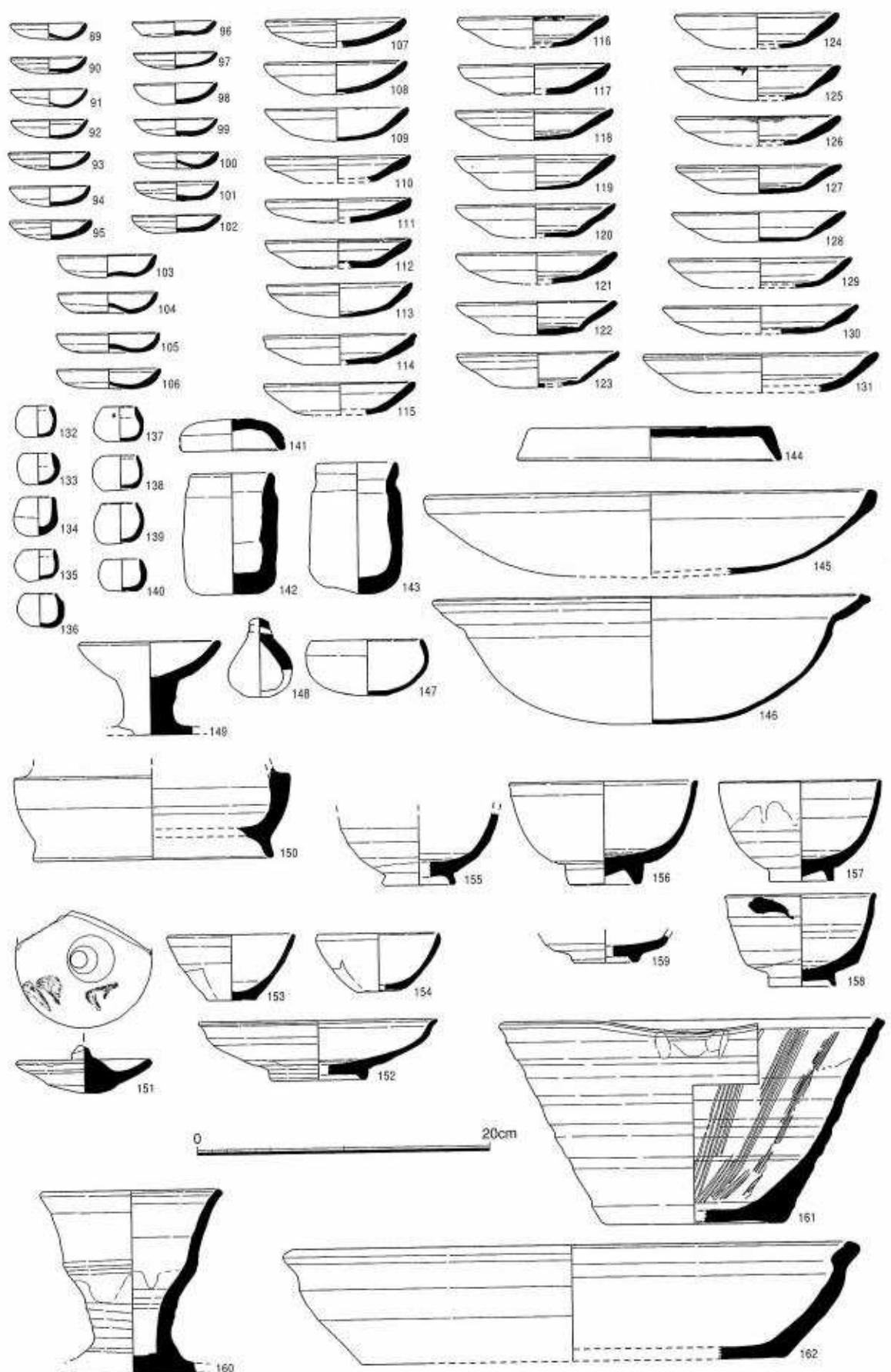


図14 土壌04（上層：第1層、第2層）出土遺物実測図（1/4）

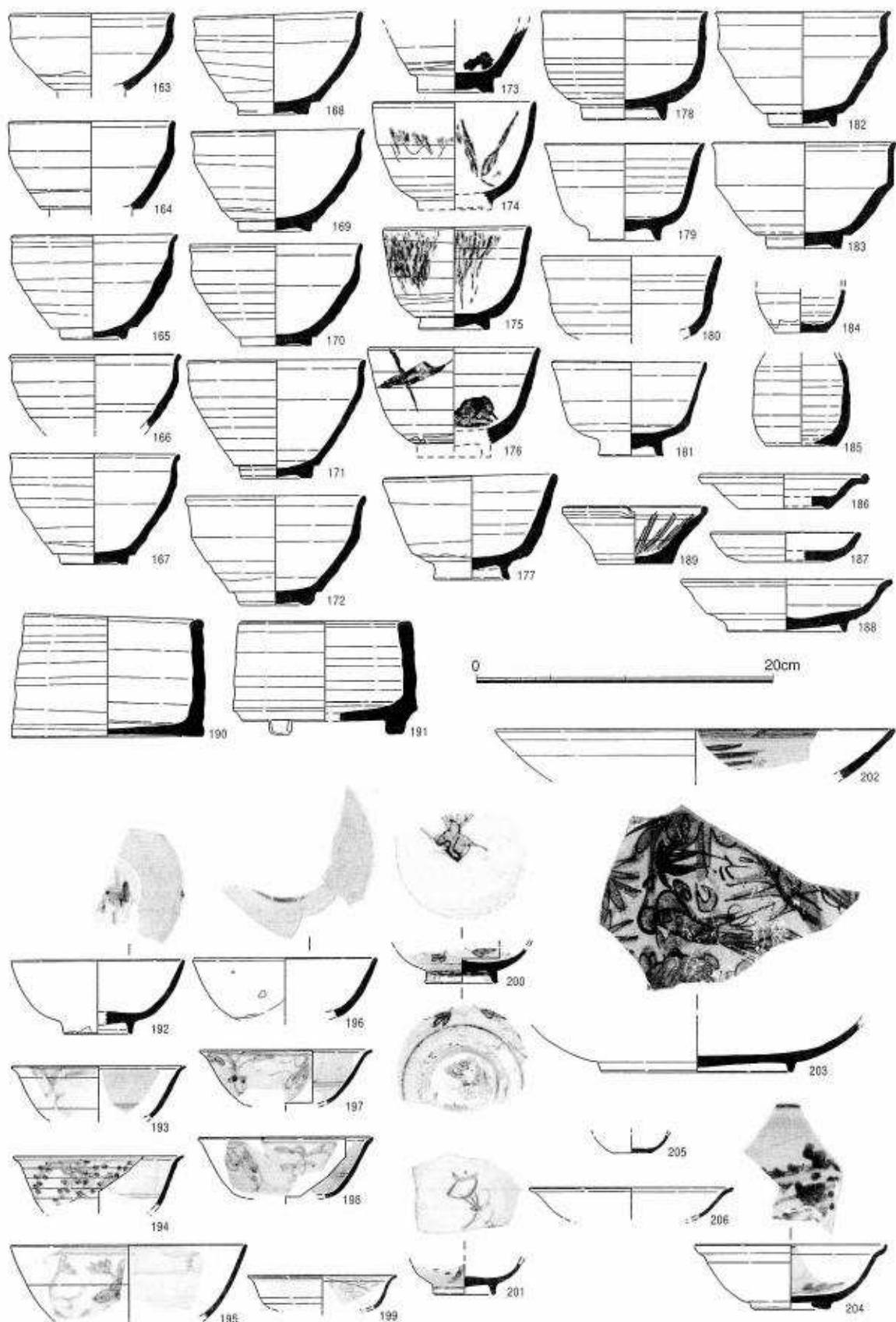


図15 土壌04（上層：第1層、第2層）出土遺物実測図（1/4）

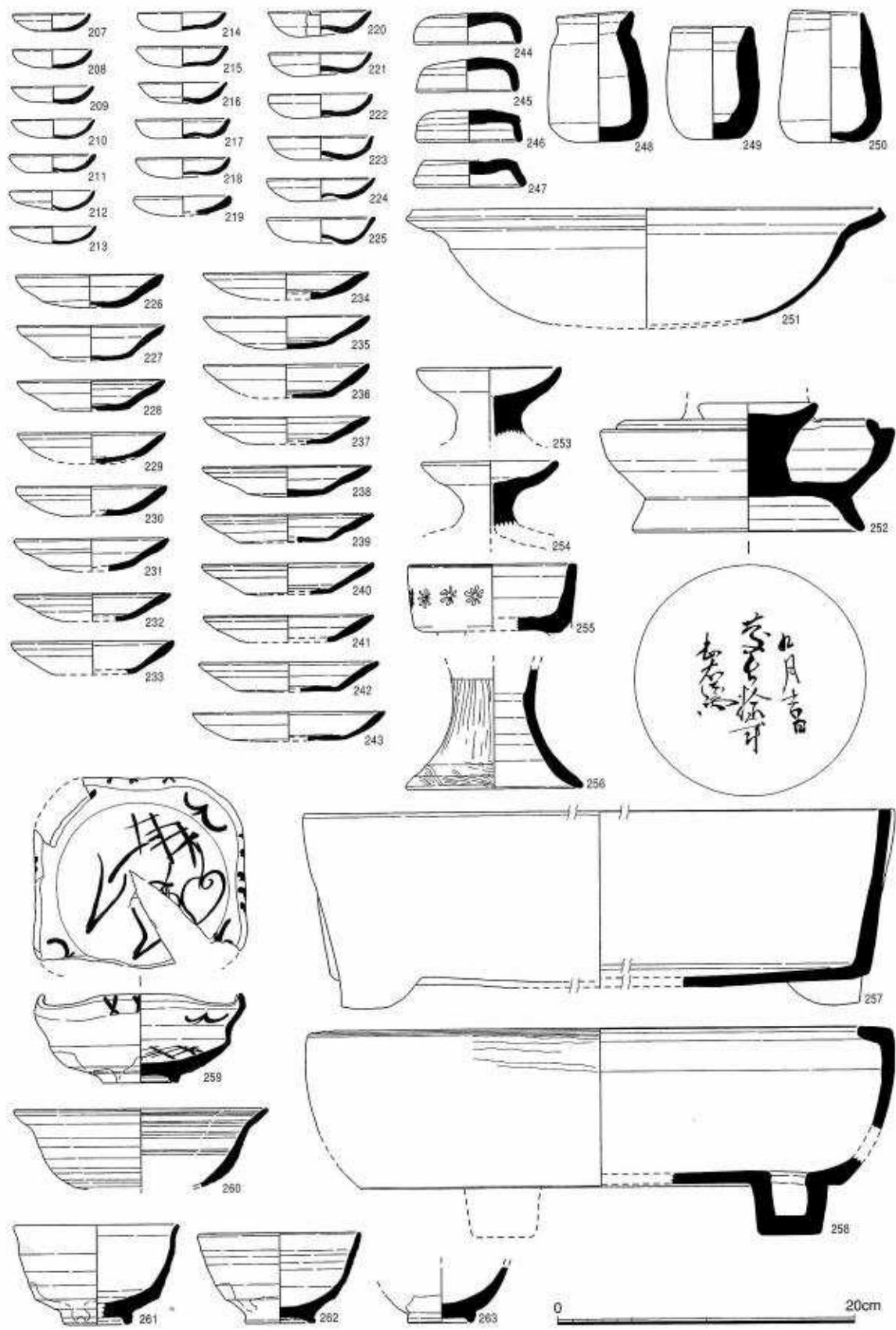


図16 土壌04（下層：第3層、第4層）出土遺物実測図（1/4）

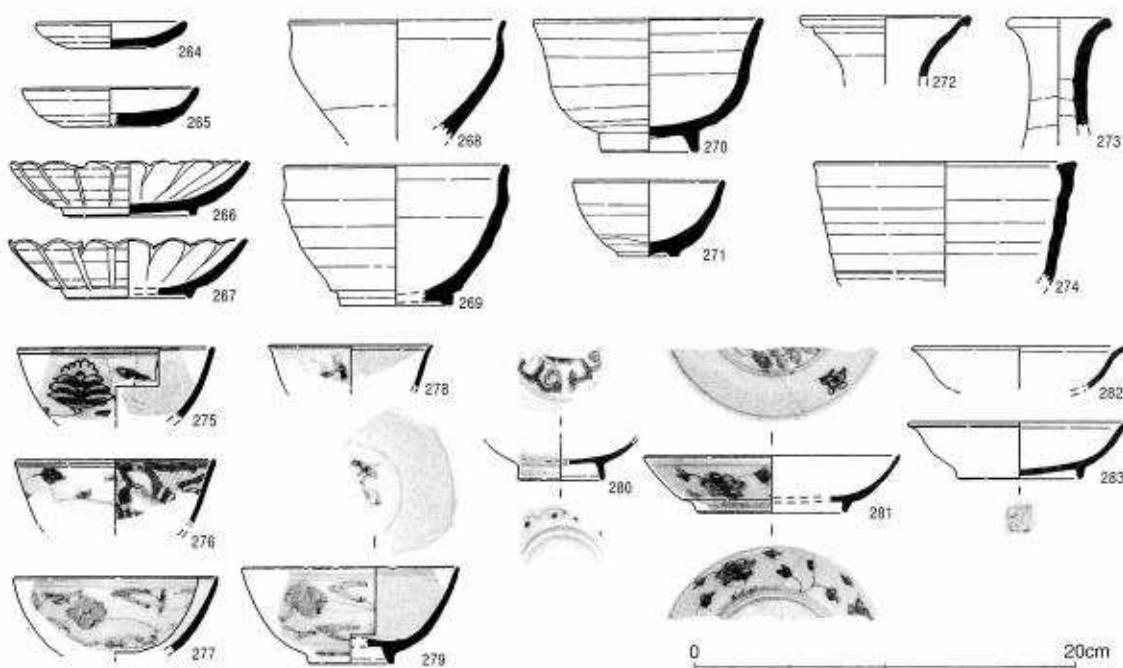


図17 土壌04（下層：第3層、第4層）出土遺物実測図（1/4）

256は花瓶の脚部で外面は丁寧なミガキが認められる。257は平面角形の火鉢で、接合する他角がないため大きさは確定できない。口縁から体部外面はミガキがあり、底部の四隅に足が付く。258は円形の火鉢で口縁から体部の外面はミガキが施されて丁寧に仕上げられている。底部には円柱形の三足が付く。259～263は唐津系の施釉陶器で259は平面が隅丸方形を呈す向付である。釉は灰色に発色し、口縁部四辺と内面に鉄絵を描く。260は鉢、261～263は碗である。264～274は美濃瀬戸系の施釉陶器で264・265は灰釉の丸皿、266・267は長石釉のかかった菊皿、268・269は天目茶碗、270は長石釉碗、271は鉄釉小碗、272は灰釉壺の口縁部分、273は鉄釉壺の口頸部、274は灰釉の香炉である。275～280は中国産の染付磁器碗、281は同皿、282・283は中国産の白磁の皿である。当遺構からは、これら図示したものの他に土師器の羽釜、瓦器の大和産と思われる鉢、丹波産の焼締陶器擂鉢なども出土している。

上層、下層と分けて報告したが、それぞれの土師器皿の群を比較してみると口径の分布が上層でやや小型にシフトしている傾向が認められる。下層はそれぞれの口径分布や形態的特徴から土師器皿の形式分類ではXI期中に位置づけられる土器群と考えられ、また上層の一群についても次形式への若干の変化が進行している傾向は認められるもののさほどは時間差はないものととらえてよいと思われる。「慶長拾年」はXI期中という型式に推定されている時間位置でいえばかなり古い方に位置づけられるが、瓦灯に年号が記され実際に使用される期間を考慮すれば極めて自然な出土状況と理解できる。

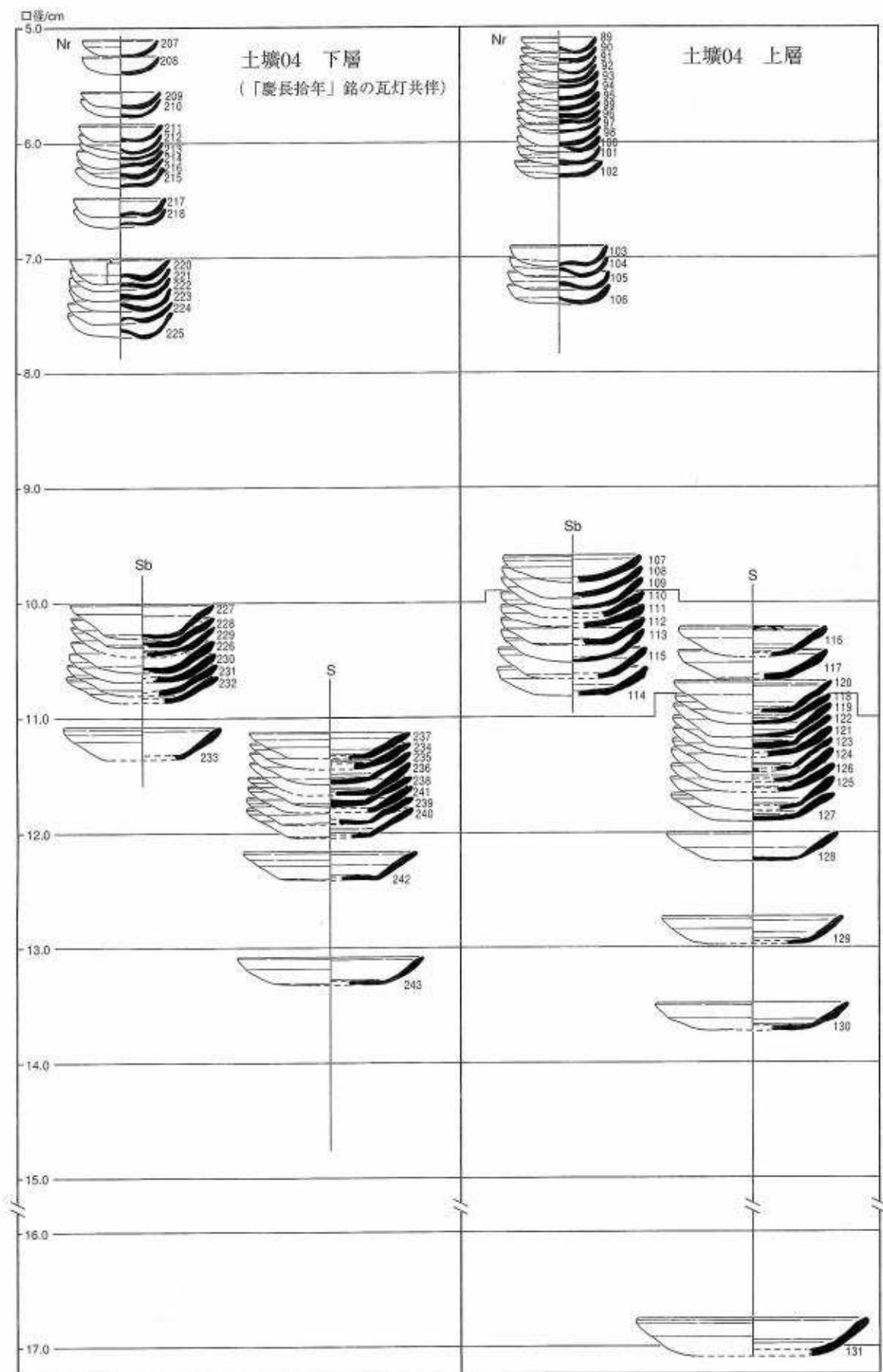


図18 土壌04出土土器・瓦の口径分布図

金属・骨角製品

土壤382出土鏡 (図19・図版11)

菊花双鳥鏡285は径9.7cm、界圈径6.5cm、縁高0.65cm、縁幅0.26cmを測る。型押しによる菊花を全面に配す。鋤座は亀甲形鋤で、甲羅は花亀甲文である。

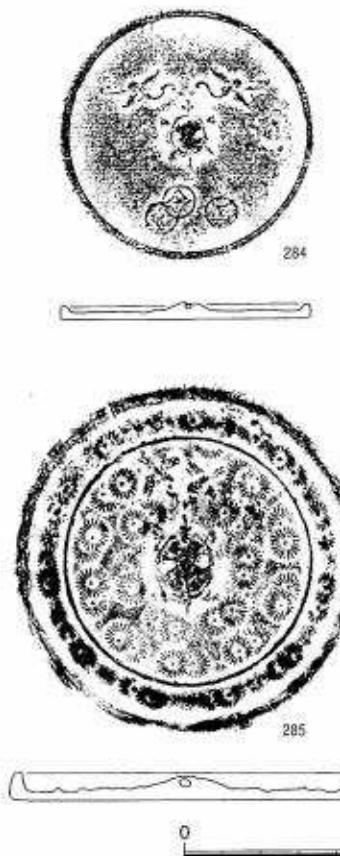


図19 土壤102・382出土
鏡拓影・実測図 (1/2)

土壤102出土鏡・錢貨 (図19・20・図版10)

双鶴鏡284は径6.7cm、縁高0.3cm、縁幅0.2cmを測る。形式化した菊花亀甲文の亀形鋤が、上向きで双鶴と三者接嘴する。砂目地らしきものが認められる。懷中鏡の一種で、いわゆる蓬萊鏡といわれるものである。錢貨286~295のうち初鋳年代がもっとも新しいものは明代の永樂通寶(1408年)

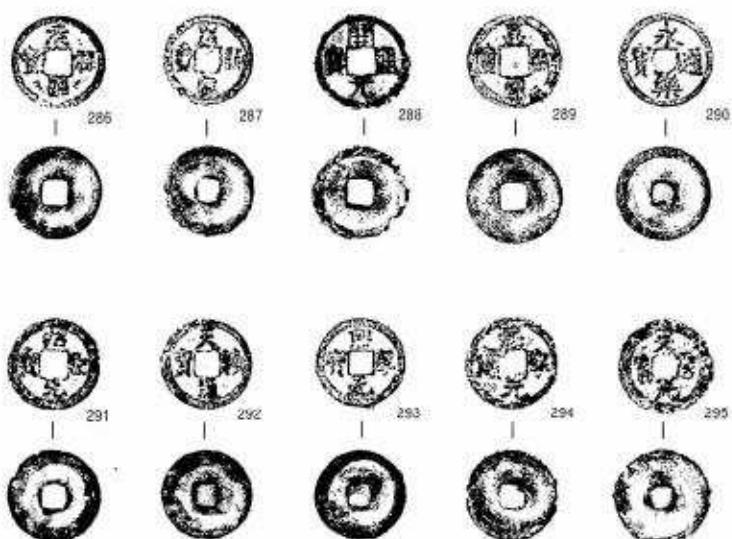


図20 土壤102出土錢貨拓影図 (1/2)

No.	錢名	錢徑(A)/mm	錢徑(B)/mm	内径(C)/mm	内径(D)/mm	錢厚/mm	量目/g
286	元符通寶	24.96	24.79	20.03	20.34	0.99~1.11	2.50
287	皇宋通寶	24.31	24.12	20.03	18.58	1.25~1.33	3.11
288	開元通寶	24.98	25.96	21.31	20.88	1.15~1.77	2.95
289	嘉祐通寶	25.30	25.36	19.69	19.30	0.91~1.10	3.21
290	永樂通寶	24.96	24.96	21.06	20.86	1.36~1.49	4.29
291	紹聖元寶	24.76	24.46	18.41	18.94	1.27~1.32	3.39
292	天禧通寶	23.88	24.14	19.31	19.14	1.21~1.26	3.16
293	熙寧通寶	23.73	23.90	19.14	19.03	1.25~1.44	3.77
294	熙寧通寶	24.49	24.39	19.60	20.77	1.23~1.54	3.72
295	天聖元寶	25.50	25.61	18.56	18.40	1.40~1.67	3.86

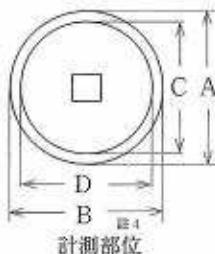


表1 土壤102出土錢貨計測値一覧表

である。唐代初鑄の開元通寶（621年）をのぞき他はいずれも宋代に属する。皇宋通寶287と嘉祐通寶289は篆書である。

土壤04・161出土金属製品・骨角製品（図22・図版9・11）

296～308は銅製天秤具である。その内296～299はS状金具で、300・301はその半製品である。302・303は木瓜部分の残欠。304・305は棹の方に付く下の指針で、銅板を切って作る。15度の鋭角をなす。306・307は棹で大小がある。皿308には刻印は認められない。309～311はキセル。312は両端を耳かきと爪楊枝風に作る。313は用途不明。切羽314は周縁に細かな刻み目を入れ

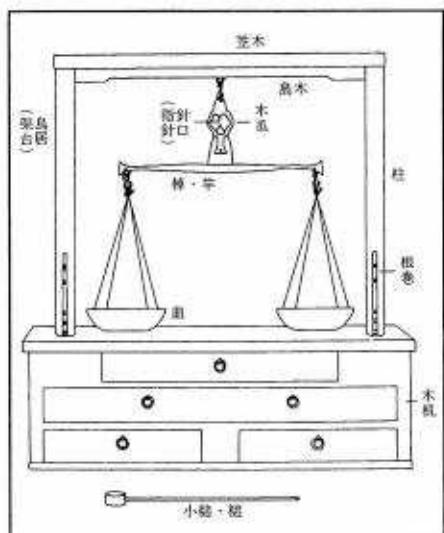


図21 天秤模式図
(岩田重雄氏作図)

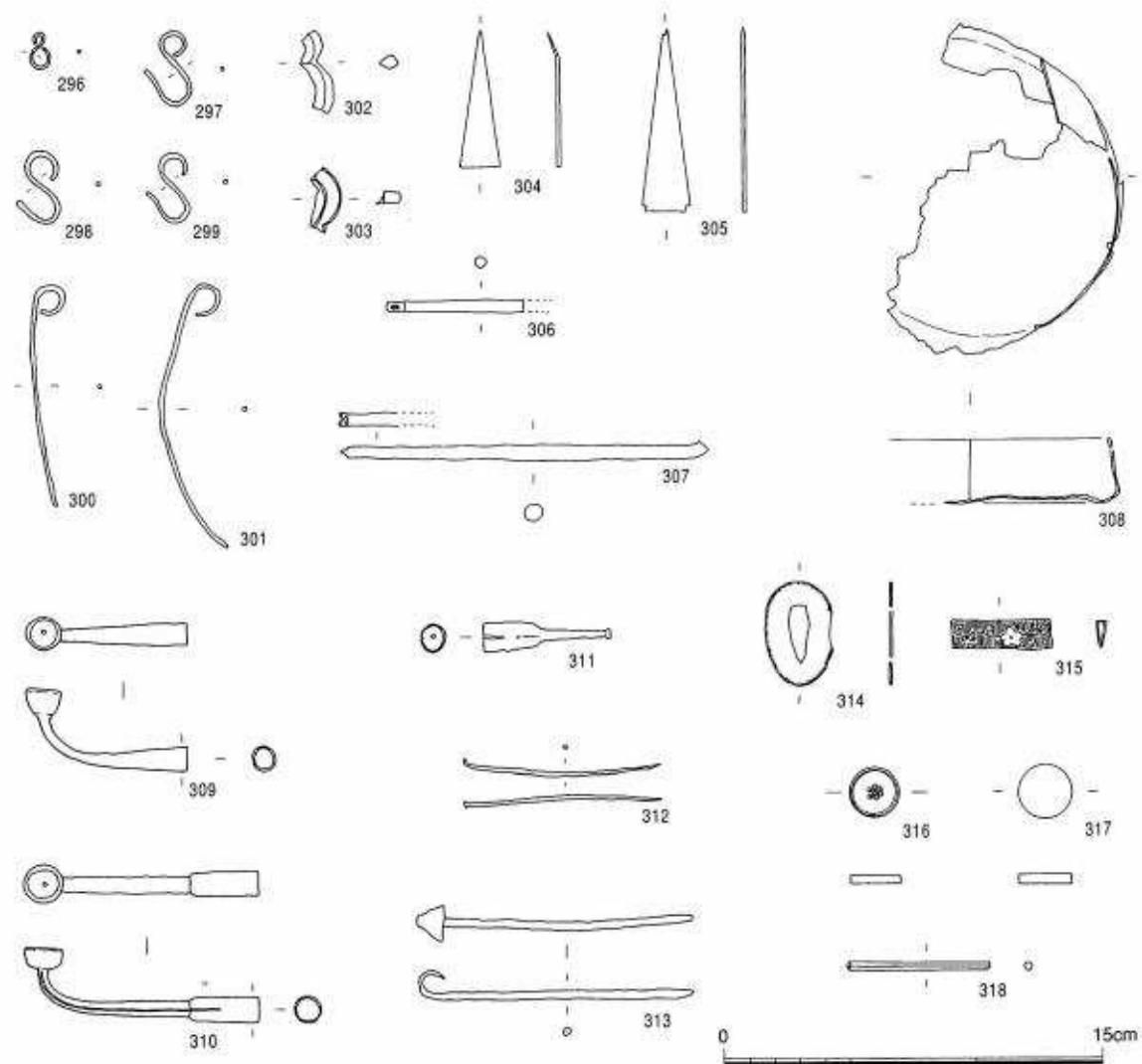


図22 土壌04・161出土金属製品（296～315）・骨角製品（316～318）実測図（1/3）

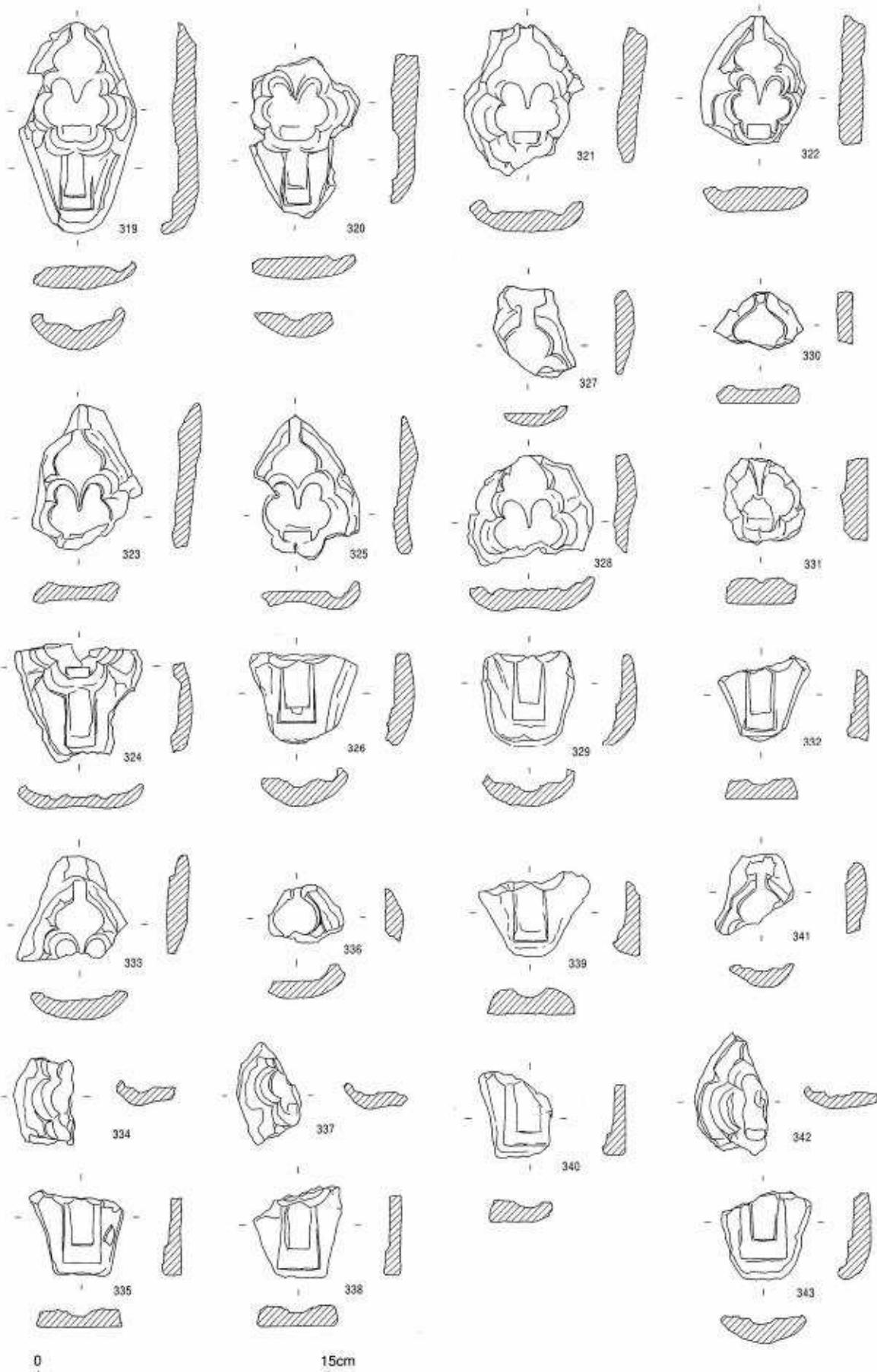


図23 木瓜鑄型実測図 (1/3)

る。315は小柄、蔓花の文様を施す。316・317は双六の駒、骨製である。大阪城跡などで出土例がある。棒秤の棹318はおそらく鹿角製。両端を欠く。上目（うえ）、前目（うしろ）、向目（てまえ）の三方に目盛りが付く。目盛りは錫に水銀を混ぜ、ペースト状にして穴につめ、錫を残す方法で作られる。302のみ土壙161出土。

土製品

木瓜鑄型（図23・図版8）

天秤の針口・木瓜とよばれる部分の鑄型である。スサ入りの粘土の上に真土を塗る。鑄型の背面が丸みをもつものと平坦なものが対になる。湯口は上に付く。木瓜の形状はほとんど同じだが、下の指針を通す中型を作るための工夫に幅の大小が認められる。319～322は土壙04、323～332・339・340は土壙26、333～335は土壙161、336～338は土壙02、341～343は土壙151出土である。

なお、ある種の中国鏡の製造過程の中で、中型を作るために炭を埋め込むことがあり、あるいは木炭を削り成形して充てたものとも考えられる。一部採取した炭の断片の中に、それをうかがわせるものがある。今後、鋳造遺構の調査においては、木炭なども注意して採集する必要がある。

坩堝・羽口（図24・図版11）

取瓶には大小のものがあり、小壺風の344と皿状の345～354、取っ手が付く片口の355・356がある。この355・356の片口部は木瓜鑄型の湯口にピッタリと合う。345・349の内面には緑青は認められず、金とみられる湯玉が認められる。大型の坩堝358はスサ入りの粘土で作る。357は轆の羽口である。344～350は土壙151、355～357は土壙04、351～353は土壙342、354は土壙144、358は土壙70出土である。

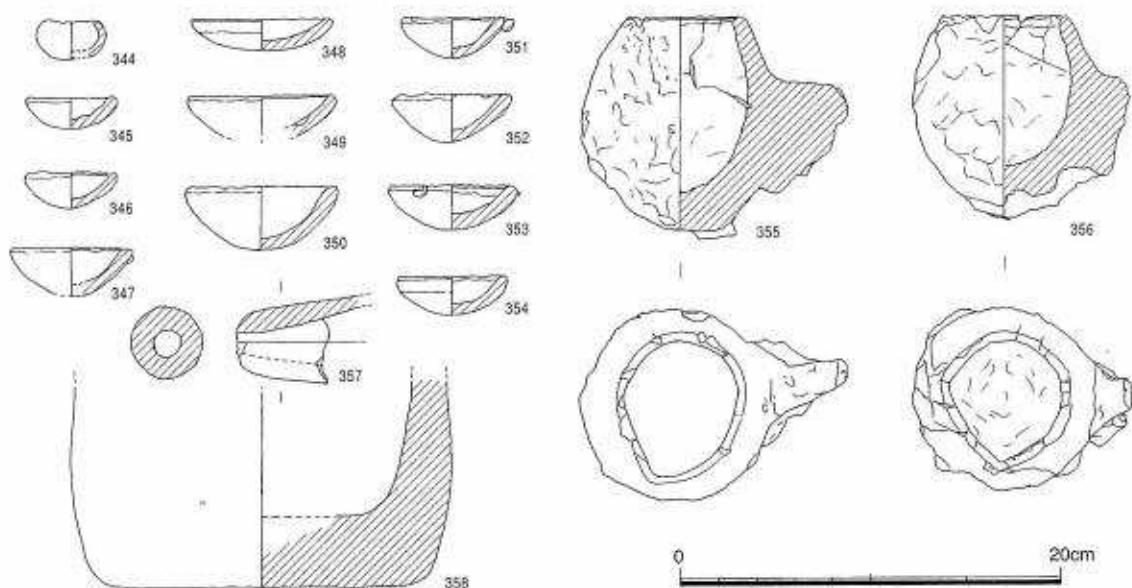


図24 土製品実測図（1/4）

瓦類

単弁八葉蓮華文軒丸瓦 (359) (図25・図版12)

池403ⅡD区第1層出土。外区に16個の珠文を巡らし、唐草を右回りに巡らす。中房に蓮子を配す。范割れが顕著である。瓦当裏面はナデ調整を行う。胎土は精良で、焼成は良好、灰色を呈する。栗栖野瓦窯産である。

唐草文軒平瓦 (360) (図25・図版12)

池403ⅣF区出土。対向蕨手文を中心に左右に唐草が展開する。瓦当上端部はヨコ方向の削りを行う。胎土は精良で、焼成は良好、灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (361・362) (図25・図版12)

池306VIC区瓦溜まり出土。中房は凸形で、「卍」を配す。361は范の摩滅が著しく「卍」部分はへらで修正を加えている。362の中房は361より一回り大きく「卍」も立派である。いずれも瓦当裏面はナデ調整を行い、丸瓦部裏面の布目はきわめて細かい。二次焼成を受け一部赤変している。^{註6}胎土は砂粒を含み精良、灰色を呈する。広隆寺に同文瓦の出土がある。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (363) (図25・図版12)

池306VIC区瓦溜まり出土。小型の瓦である。中房は凸形で、蓮子は不明。外区に珠文を12個巡らす。瓦当裏面はナデ調整を行う。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成は良く硬質で、灰色を呈する。

蓮華文軒丸瓦 (364) (図25・図版12)

池306VIC区下層出土。范の痛みが著しく、中房には蓮子らしきものが1個認められるのみである。花弁は幾何学模様まで退化している。瓦当裏面はナデ調整による凹凸が顕著に残る。胎土は精良で、焼成は良く灰白色、表面は黒色を呈する。

複弁蓮華文軒丸瓦 (365) (図25・図版12)

池306VIC区下層出土。中房は四分割に区切り、1+4の蓮子を配す。花弁が周縁に接する。瓦当裏面はナデ調整を行う。胎土は精良、焼成は良く、灰白色を呈する。二次焼成を受けている。

二巴文軒丸瓦 (366) (図25・図版11)

池306VIC区下層出土。右巻きの二巴文を配し、巴の末尾がつながり圓線を形成する。瓦当裏面はナデ調整を行う。胎土は精良で、焼成は良く、灰色を呈する。二次焼成を受けている。

剣頭文軒平瓦 (367~369) (図25・図版11)

池306VIC区下層出土。368は中央に三巴文をおき、左右に剣頭文を3個体配す。いずれも頸部はヨコ方向の削り、側面はタテ方向の削りを行う。折り曲げ技法で成形する。胎土は精良、369のみ白色砂粒を多く含み、二次焼成を受けて赤変している。

唐草文軒平瓦 (370) (図25・図版12)

池306VB区第2層出土。右行唐草文を配す。瓦当上端部及び頸部はヨコ方向の削り、側面部はタテ方向の削りを行う。瓦当裏面に指圧痕顕著に残り、一部布目痕が認められる。折り曲げ技法である。胎土は精良、焼成は良く、灰白色を呈する。

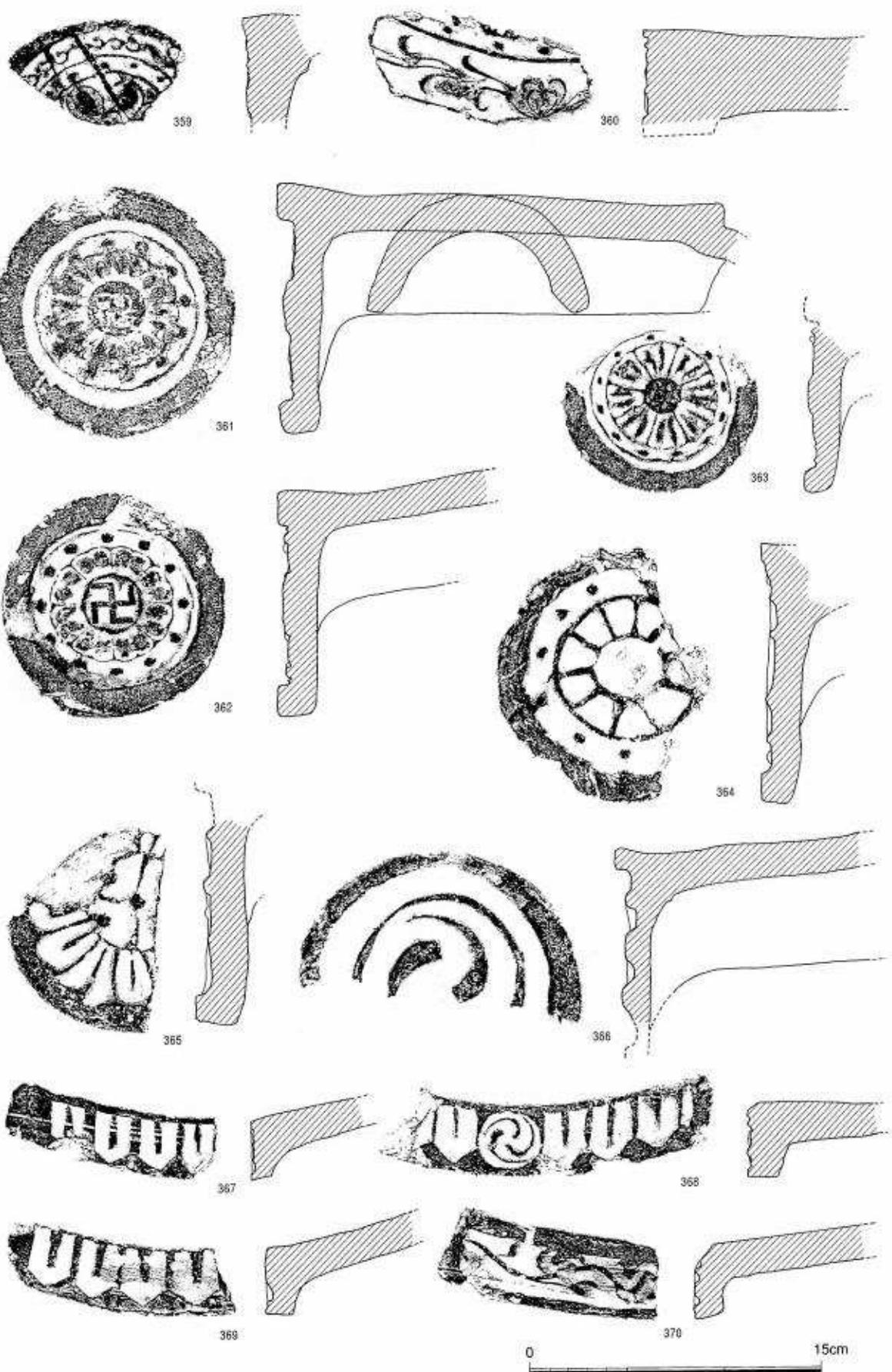


図25 池403・306出土軒瓦拓影・実測図 (1/3)

V 考 察

本調査においては、鎌倉時代から江戸時代にかけて注目すべき遺構を検出した。とくに、鎌倉時代の石組みの堰をもつ庭園遺構、鏡を埋納した地鎮跡、副葬品が一括して出土した中世墓、そして江戸時代の天秤工房跡などである。以下それらの遺構についてあらためて概述し、若干の考察を述べる。

1 平安時代から鎌倉時代

池403・306

調査区全域にわたって検出した池403・306は、石組みの堰をもち、北から南流してきた水の流れをせき止め、水量を調節した後、十五町の敷地外・三条坊門小路へ排水していく構造をもっている。このような堰をもつ庭園遺構は平安京跡における初めての調査例となるもので重要な発見となった。池403の堆積土中からは平安時代後期の遺物も少量出土しているが、池底の泥土層からはⅦ期古を中心とする土器類が大半を占める。また池廃絶後に埋められ、整地された土層から出土した土器類もほとんどがⅦ期に属するもので、今回検出した庭園遺構の年代を13世紀半ばから後半に措くことができる。

文献史料によれば、平安時代中期この十五町には左京大夫源泰清の邸宅があったとされ、のちに村上天皇女・資子内親王の御所となった。11世紀には三条上皇の三条院となり、上皇の崩御後、12世紀の半ば三条院の跡地には二条天皇の押小路東洞院内裏が置かれた。鎌倉時代になると三条坊門押小路殿が営まれ、後嵯峨・後深草・龜山各上皇三代にわたる後院地とな^れた。この押小路殿は建治3年(1277)3月21日に焼失し、これ以後、十五町の沿革は不詳とされている。

以上の文献の記録より、堰を伴う池403は、出土遺物の年代より、鎌倉時代の三条坊門押小路殿の庭園遺構である可能性がきわめて高い。また池306の瓦溜りから出土した大半の瓦が二次焼成を受けて赤変していることから、これは、建治3年の三条坊門押小路殿焼失に伴い焼失した建物の瓦群とみることができる。

土壤381・382

池306の北東肩部で検出した土壤381・382は、それぞれ単独で漆椀と銅鏡を埋納しており、何らかの地鎮めの遺構とみられる。土壤382から出土した銅鏡285は、鏡背の菊花散らし文が型押し技法で作られ、また紐座の亀甲形鉢の甲羅が花亀甲文である。これらの特徴は13世紀後半から現れ、14世紀に顕著になるものとされている。土壤381からは漆椀1個体のみ出土したが、小さな方形の掘形の中に、このあたりの地盤層である地山に近い黄褐色粘土で丁寧に埋められている。土壤382の埋土とは相違するが、また漆椀の年代及びその意味なども不明なもの、層位的な所見より、一応、鏡と同時期あるいはそれに近い時期のものと考えておきたい。鏡の年代から、これらの遺構は三条坊門押小路殿に伴う何らかの地鎮遺構とみられ、あるいは池306の瓦溜りの出土状況などから、この辺りに御堂などがあったことも想定できる。

2 室町時代

平安京跡における左京域の調査、とくにこの周辺においては、室町時代では井戸跡などの生活に伴う遺構が高い密度で検出されるものであるが、今回の調査においてはそのような遺構は希薄であった。室町時代の遺構としては、15~16世紀にかけての土壙墓群が主要なものであった。文献史料の記録からは、建治3年（1277）の三条坊門押小路殿焼亡以降、江戸時代に至るまで、当地の沿革は不詳とされており、あるいはそれらを裏付けるような調査結果となった。

土壙墓群

土壙墓群の中で、火葬骨が出土した土壙414は、出土した土器類がすべて二次焼成を受けており、火葬時に供養されたものとみられる。火葬した後、穴を掘って火葬骨と土器類などを一緒に埋葬した状況を呈する。出土した土器類はⅧ期中のもので、当地における土壙墓群の中では一番古期に属する。15世紀前後の年代が与えられる。

土壙314・320・322の内、土壙314から銅錢20枚が出土したほかは、いずれも土器などの副葬品はなかった。人骨の遺存状態は悪く、埋葬状況も不明である。また釘などの出土がなく、木棺を伴ったものかどうかは不明なもの、掘形の大きさや形状などからみておそらく屈葬と考えられる。Ⅸ期に属する土器が少量出土している。

土壙102は木棺墓（あるいは箱式木棺墓）で、青磁碗、白磁小碗、香炉、土師器皿2個体、鏡、銅錢10枚、漆椀などの副葬品が完品で出土した。なかでも鏡面を上にした懷中鏡に漆小椀を置き、青磁碗で蓋をするような出土状況は、おそらく原位置を保っており、注目される。土師器皿84のいわゆるへそ皿の内面には、まじないの一種とみられる朱書きが認められる。7ヶ所に笛の葉状の模様を施す。よく似たものに草戸千軒町遺跡^{註10}で出土例がある。双鶴鏡284はいわゆる蓬莱鏡と呼ばれるものである。鶴亀三者が接嘴するものとしての初例は熱田神宮の文安2年（1445）の墨書のある梅花散双鶴鏡^{註11}が知られている。文様の空間部に砂目地らしきものが認められるが、これはⅩ期中以降に盛行する技法と言われている。土師器皿84・85がⅨ期新からⅩ期古までに属するもので、やや鏡との年代のずれが認められる。更に検討する必要があろう。

3 江戸時代

L字型の堀に囲まれた江戸時代初期の天秤工房跡を検出した。これまで、堺環濠都市遺跡の調査などで、元和元年（1615）大坂夏の陣に伴う焼土層から天秤の製品そのものが何点か出土しているが、工房跡の発見は国内で初めてとなった。とくに土壙04からは木瓜鑄型、銅製天秤具などが多量の土器類とともに出土し、その土器類の中に慶長拾年（1605）と墨書きされた紀年銘土器が含まれ、実年代を知る貴重な手がかりを得た。

天秤について

江戸時代においては、泉州堺出身の中堀氏一族が独占的に天秤の製造を行っていた。江戸時代の後期、当時江戸で天秤を作っていた中堀長兵衛というものが、天秤の専売権を得ようと町奉行に上申書を出したが、両替商などの反対により失敗したことが両替商の日記などに記録として

注13
残っている。

安永9年（1780）3月17日の両替屋「中井家日記」に、中堀長兵衛の願書を引いて

「御天秤針口之儀ハ慶長年中私先祖與一郎衛門と申、南蛮国より相渡候針口を形ニ取工夫仕、初で御天秤針口仕立奉差上」

と記され、慶長年間（1596～1615）に、先祖の中堀與一郎衛門が木瓜形の針口をもつ天秤を作り始めたことを述べている。

江戸時代の天秤（図21）は指針の枠が、紋章の豎木瓜に形が似ていることから、木瓜といわれ、指針は針口と呼称し、針口のついた天秤は単に針口と言うようになった。またその職人を針口師といい、天秤屋は針口屋とも言われるようになった。^{注15}

江戸時代前期の京都案内記『京羽二重』には、当時京都には針口師が5名いたことが以下のように記されている。^{注16}

両かへ町姉小路下ル町	堺 與三兵衛
御池東洞院西へ入町	同 與一郎
右同町	同 與十郎
松原室町西へ入町	同 與三佐衛門
大宮一条下ル町	同 長兵衛

堺は出身地を示しており、いずれも姓は中堀である。

今回の調査地・平安京左京三条三坊十五町は、御池東洞院西入るの町にあたり、上記の與一郎、與十郎の針口師が居たところに該当する。現在の町名「仲保利町」にその名を今日に伝えていることからも窺える。

第1面で検出した堺01は、平安京の宅地割り・四行八門制の区画にはほぼ重なっており、平安京左京三条三坊十五町における西二行北七門と北八門の境界上に堺01の東西掘立柱列が14間分、西一行と西二行の境界上に南北柱列2間分がのっている。つまりこのL字形の堺に囲まれた敷地は西二行北八門に相当し、東洞院通（東洞院大路）より西へ三軒目（三戸主）にあたる。京都市地

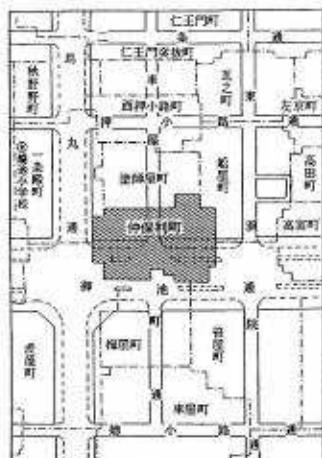


図26 「仲保利町」位置図

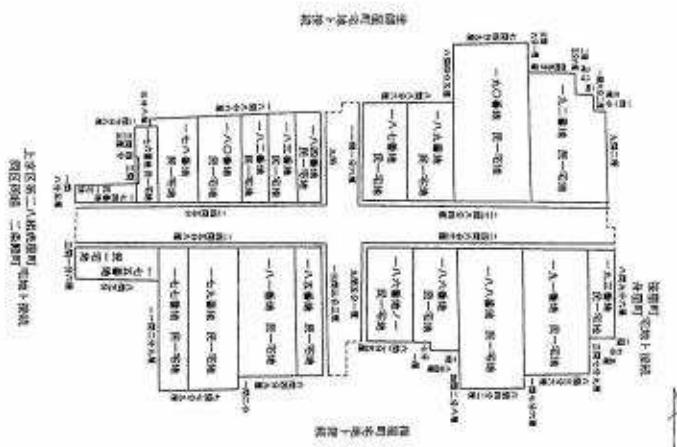


図27 明治17年地籍図

名変遷史「仲保利町」に示されている明治17年の地籍図では、堺01が、178・180番地の北側・塗師屋町との境界に一致している。この地籍図で示されている「仲保利町」は西二行北八門と西三行北八門を中心として占有するもので、このことから、「京羽二重」にみえる針口師は、西三行北八門に中堀與一郎宅、車屋町通りを挟んで西二行北八門の当該地に中堀與十郎宅があったことが推定できる。

なお、堺出身の中堀氏は堺、奈良、大坂、京都、江戸に移り住み、一族の大部分は大坂と京都にいたといわれており、上記の「中井家日記」などから、当地の中堀與一郎は本家の流れを汲むものとも考えられる。また、多量の木瓜鑄型とともに出土した瓦灯252は、底部外面に「九月吉日 慶長拾年 甚右衛〈花押〉」の墨書きがあり、おそらく出入りの業者・何某甚右衛門から開業祝いに際し、灯火油などとともに贈られたものであろう。

角秤の棹318について

江戸時代棒秤の製造は、幕府から許可を受けた神家と守随家の両家が特権的に支配し、神家は西35ヶ国（壱岐・対馬を含む）、守隨家が東33ヶ国を掌握していた。神家の初代善四郎（秤屋善四郎）が京都において秤の製造を開始したのは、その没年が寛永10年（1633）であることから天正末から慶長初年の頃と言われており、そのことから土壙04から出土した棒（角）秤の棹318は、初代神家の時代のものとみられる。

神家と守隨家では、棒秤の名称や目盛りの呼称及び打ち方に多少の違いがある。神家の銀直秤には、角秤、柿秤、継秤、象牙秤などがあり、棹の種類によって星（目盛り）の打ち方が異なる。^{註19}その内、角秤の目盛りの規定は、上目（うえ）が15匁、前目（うしろ）が50匁、向目（てまえ）が200匁と定められている。守隨家の角秤では、上目17匁、前目50匁、元目160匁となっている。^{註20}

角秤の棹318を神家のものとして復原すると図28のようになり、上目で5匁2分までの星が認められる。この場合星一つが1分である。前目で19匁8分～34匁8分まで、同じく星一つが2分、向目で84匁～121匁まで、この場合は星一つが1匁、と以上のように読むことができる。神家の規定通りであれば、もとの棹の長さは8寸前後が考えられる。神家の棒秤として何ら不都合は認められないが、神家以前の角秤である可能性も考えておく必要があろう。なお、厘直秤については、神家では1厘直秤と2厘直秤があり、いずれも上目のみ目盛りを打ち、それぞれ1.5匁、5匁までの重さを量ることができる。そのときの星一つは1.5匁の場合は1厘、5匁の場合は2厘となっている。^{註21}

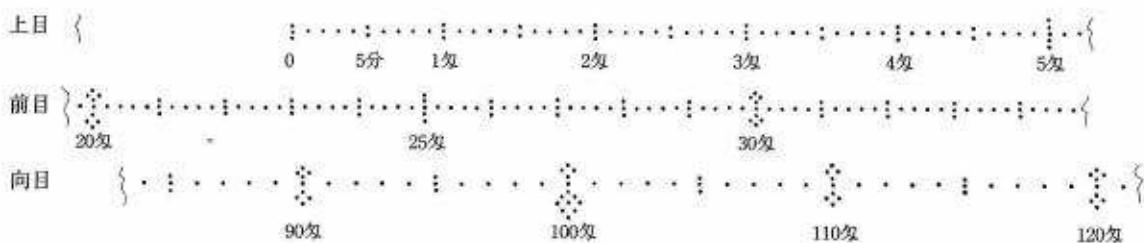


図28 土壙04出土棒秤概略図

4 結語

今回の調査においては鎌倉時代から江戸時代にかけていくつかの新たな知見を得ることができた。鎌倉時代の石組みの堰をもつ庭園遺構は、三条坊門押小路殿の庭園の一部である可能性がきわめて高く、今後の庭園研究に貴重な資料を提供することとなった。また中世墓群の検出は、当地の南西隣接地・左京三条三坊十一町の調査で、同時代の数十基にのぼる土壙墓群の存在が確認されており、15~16世紀代にかけて、この地域が当地を含む墓域空間を形成していたことが明らかとなった。それは同時に、近年の調査研究で明らかになりつつある中世墓における火葬から土葬への回帰^{註四}が、端的にあらわれた調査結果ともなっている。

江戸時代の天秤工房跡の発見は国内で初めてであり、木瓜鑄型とともに出土した慶長拾年の紀年銘をもつ墨書き土器の存在は、京都における天秤作りの開始年代を想定できる根拠となるものである。それと共に、紀年銘土器と共に出土した土器群は、きわめて一括性の高い性格を有しており、17世紀前半の標準資料の一つとして今後重要な位置を占めるであろう。

最後に今ひとつ指摘しておきたいのは、L字形の堀01は明治17年の地籍図の境界線と一致しており、そしてまた、平安時代の四行八門制の宅地割りにもほぼ重なることである。当地は平安時代から鎌倉時代にかけて里内裏や院の御所が営まれ、当然一町全体を占有していたと考えられ、それは鎌倉時代の池跡の出土状況からも明らかである。平安時代の早い時期から鎌倉時代の三条坊門押小路殿の焼亡まで、とそれ以後、3世紀程の空白を経て、近世初期の段階で平安時代の四行八門制に則った宅地割りが踏襲されている事実は、平安京跡における土地利用の変遷を考える上で重要な問題を孕んでいる。

以上、本調査においては多大な成果を上げることができた。これもひとえにニチコン株式会社の埋蔵文化財に対する深いご理解と全面的な協力のおかげであり、末筆ながらあらためて御礼申し上げる次第です。また江戸時代の天秤・棒秤に関しては、日本計量史学会顧問の岩田重雄氏より、数多くの貴重な資料の提供と幾度となく直接的な御教示を賜り、秤関係資料の深さを認識できたことはなによりも幸いであった。ここにあらためて感謝の意を表する次第です。

註1 角川日本地名大辞典 26京都府 角川書店 1991年

日本歴史地名体系27 京都市の地名 平凡社 1979年

山田邦和 「左京と右京」「平安京提要」 諏古代学協会・古代学研究所 1994年

註2 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年」「研究紀要第3号」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

註3 測定機器は㈱ミツトヨの「デジマチックキャリバーCD-15C」と㈱エー・アンドディの「バーソナル電子天秤EK120G」を使用した。

註4 表記は「永井久美男」「中世の出土銭」「兵庫埋蔵銭調査会 1994年」に準じた。

- 註5 和鏡研究の第一人者・廣瀬都異氏の生前の話として、嗣子漱彦氏より御教示を賜った。
- 註6 「木村捷三郎収集瓦図録」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 註7 註1と同じ。
- 註8 久保智康 「中世・近世の鏡」「日本の美術」J 394 至文堂 1999年
- 註9 草戸千軒町遺跡 「7次調査 戲画土器」「中世の呪術資料」第4回中世遺跡研究集会 1984年
- 註10 広瀬都異編 「扶桑紀年銘圖説」大阪市立美術館 1938年
- 註11 註8と同じ。
- 註12 「堺市文化財調査概要 第51集 1990年」「堺市文化財調査概要報告 第15冊 1991年」「堺市文化財調査概要報告 第49冊 1995年」(堺市教育委員会)の報告に出土例がある。
- 註13 岩田重雄 「近世以後の天びんの指針と架台について」「第9回計量史をさぐる会」 1986年
- 註14 「中井家文書」日記 三番 国立史料館藏
- 註15 岩田重雄 「はかりの歴史」「設計工学」第38巻第9号 2003年
- 註16 「京羽二重」「京都叢書」
- 註17 松本利治 「京都市町名変遷史5」京都市町名変遷史研究所 1990年 図26・27は左記より転載。
- 註18 林 英夫 「秤座」吉川弘文館 1973年
- 註19 岩田重雄 「JAPANESE SCALES and WEIGHTS」「EQUILIBRIUM」 1981年
- 註20 同上及び「守隨秤座記」新生社 1967年
- 註21 註19と同じ。
- 註22 「平安京左京三条三坊十一町」「平安京跡研究調査報告 第14輯」(財)古代学協会 1984年
- 註23 河野真知郎 「中世の墳墓群」「歴史時代の考古学」学生社 1998年

表2 遺物観察表

池403(図10~11)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色 調	備 考	層 位
1	皿Ac		4.4	1.3	精良	10YR8/2		III E区最下層
2			4.8	1.0	精良	10YR8/2		III C区最下層
3			4.7	0.9	精良	10YR8/2~同8/3		III D区第1層
4			4.9	0.8	精良	10YR8/1		III D区第1層
5			4.4	0.8	精良	10YR8/1		IV D区第3層
6			4.6	0.8	精良	10YR8/2		壠1と壠2間 最下層
7			5.4	1.0	精良	10YR8/2		IV D区第4層 (泥土)
8			5.4	1.2	良	10YR8/2		IV E区最下層
9			4.8	1.0	精良	10YR8/2		壠1と壠2間 最下層
10			4.6	1.0	精良	10YR8/2		最下層
11			4.8	1.6	精良	10YR8/1~同8/2		壠1と壠2間 最下層
12			5.0	1.2	精良	10YR8/1~同8/2		壠1と壠2間 最下層
13	土師器		7.6	1.3	精良	10YR7/2	403SG排水溝	下層
14			7.8	1.6	良	10YR7/2~同8/2、一部10YR7/1	灯芯痕	III C区最下層
15			8.0	1.4	良	10YR7/2	灯芯痕	III C区最下層
16			8.0	1.5	精良	7.5YR7/3~同7/4	灯芯痕	壠1と壠2間 最下層
17			8.0	1.6	精良	7.5YR7/3~10YR7/3	灯芯痕	III C区最下層
18			7.9	1.2	良	10YR7/2	灯芯痕	III C区最下層
19			8.1	1.5	良	10YR7/2~2.5Y7/2	灯芯痕	III C区最下層
20			8.1	1.6	精良	10YR7/3	灯芯痕	IV D区第4層
21			8.3	1.6	精良	10YR7/2~同8/2		III C区最下層
22			8.2	1.4	精良	10YR7/3	403SG排水溝	下層
23			8.4	1.6	精良	7.5YR7/4	灯芯痕	壠1と壠2間 最下層
24			8.3	1.4	精良	10YR8/2~2.5Y7/2	灯芯痕	III C区最下層
25			8.3	1.3	良	10YR7/2	灯芯痕	III C区最下層
26			8.4	1.8	精良	10YR8/1~2.5Y8/2		III D区第1層
27			9.0	1.4	精良	2.5Y8/1~同7/1、黒斑あり		壠1と壠2間
28			7.6	1.9	良	7.5YR7/4	灯芯痕	IV D区第3層
29			8.4	1.7	精良	7.5YR7/4	灯芯痕	IV D区第3層
30			9.0	1.4	精良	2.5Y8/1~同8/2		III C区最下層
31			8.7	2.1	良	7.5YR7/3~10YR6/2		III C区最下層
32			11.4	(1.8)	精良	10YR7/3		壠1と壠2間
33	皿N		12.2	(2.5)	精良	7.5YR6/4		壠1と壠2間
34			12.1	(2.2)	精良	7.5YR7/3~10YR7/3		壠1と壠2間
35			12.4	3.1	精良	10YR7/3		III E区最下層
36			12.5	2.2	精良	7.5YR7/3、内面一部煤付着	403SG排水溝	下層
37			12.9	2.4	良	7.5YR7/4		III C区最下層
38			6.4	1.8	精良	2.5Y8/1~同8/2		東西第1セクション 南側IV D区最下層
39			8.3	2.3	精良	10YR8/1~同8/2		III E区最下層
40			10.7	3.0	精良	2.5Y8/2、内面底部煤付着、黒変		III C区最下層
41			12.8	3.0	精良	10YR8/2		III E区最下層
42			12.6	3.0	精良	10YR8/2		壠1と壠2間
43	皿S		12.7	3.2	精良	10YR8/2~同8/3		IV D区第4層
44			12.9	3.4	精良	2.5Y8/1		III C区最下層
45			13.1	3.4	精良	2.5Y8/1~同8/2	摩滅する	IV D区第4層
46	白色 土器	皿	7.5	1.4	良	10YR8/2	底部糸切り	IV E区最下層
47			7.2	1.6	目が 粗い	2.5Y8/2	底部糸切り	東西第2セクション 第3層
48	土 師 器	ミニユ ア器	7.4	(3.0)	精良	10YR8/3、外面一部黒変		IV D区第3層
49			7.4	(3.4)	精良	10YR8/4、外面一部黒変		IV E区最下層
50		羽釜	24.6	(5.6)	精良	10YR8/3~同7/4		III E区最下層

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
51	瓦器	小鉢	7.4	(2.5)	精良	5Y7/1, 器表5Y7/1~N4/0灰色		IVD区第4層
52		杯	10.0	2.9	精良	5Y8/1, 器表N4/0灰色	体部は輪花、見込みに暗文	III C区最下層
53		鍋	22.9	(6.2)	精良	5Y7/1~8/1, 口縁N4/0灰色、外器表5Y6/1~2.5Y4/1		最下層
54			26.0	(4.5)	精良	5Y8/1, 口縁N4/0灰色、外器表2.5Y6/2~同4/1		IVD区第4層
55			28.8	(5.3)	精良	5Y7/1, 口縁~外器表N4/0灰色		III C区最下層
56		羽釜	22.5	(5.1)	精良	5Y7/1, 口縁~外器表N4/0灰色~2.5Y4/1		III C区最下層
57			26.5	(5.3)	精良	5Y7/1, 口縁~外器表N4/0灰色		壇1と壇2間
58	須恵器	小椀	8.1	2.4	良	N5/0灰色、内面下釉2.5GY5/1オリーブ灰色	東海産。底部糸切り後高台貼り付け	III C区最下層
59		瓶	(4.6)	(17.3)	精良	7.5Y7/1灰白色、頸部~肩部白濁した薄い下釉	東海産	III E区最下層
60	白磁	皿	8.6	3.2	精良	7.5Y8/1灰白色、釉10Y7/1灰白色	中国産	東西第2セクション最下層
61	染付	碗	-	(3.3)	精良	N8/0灰白色、釉2.5GY8/1灰白色	中国産	IVD区第3層

池306 (図10)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
62	土師器	III Ac	4.9	1.0	精良	10YR8/1~同8/2		泥土第1層
63		III Sh	6.2	2.9	精良	7.5YR8/2~10YR8/2		瓦溜り
64			8.4	1.6	精良	10YR7/2	灯芯痕	第2層
65		III N	11.2	2.0	良	10YR7/3~同7/4		下層
66			12.0	2.4	精良	10YR7/3		瓦溜り
67		III S	11.8	(3.1)	精良	10YR8/2, 外面煤付着		第2層
68			11.9	3.5	精良	2.5Y8/1		第2層
69	ミニチュア 羽釜		5.7	(2.9)	精良	10YR7/3~同7/4		下層
70	瓦器	壺	5.1	8.0	精良	5Y8/1, 器表5Y8/1~N4/0灰色	肩部に暗文	下層
71		鏡	22.0	(5.6)	精良	5Y7/1, 口縁~外面N4/0灰色~2.5Y4/3		泥土第1層
72	須恵器	小椀	6.8	(2.4)	精良	5Y6/1, 内面片側に降下釉	底部糸切り	泥土第1層
73	青磁	碗	14.9	6.0	精良	N7/0灰白色、釉は7.5Y5/2灰オリーブ色	中国産。外面蓮弁、見込みに花文。高台内一面に墨付着	瓦溜り
74	緑釉	盤	33.5	(5.8)	精良	N5/0~同6/0灰色、釉7.5GY6/8緑黄色	中国産。若干ラスターかかる。	VIC区第2層

土壌414 (図12)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
75	土師器		7.2	1.8	精良	7.5YR7/4~10YR7/3	被熱あり	
76			7.2	1.7	精良	7.5YR7/4~10YR8/3、一部赤変5YR6/4	被熱あり	
77		III N	7.4	1.6	精良	7.5YR7/4~10YR7/4、一部赤変5YR6/4	被熱あり	
78			7.6	1.6	精良	10YR7/4、一部赤変5YR6/4	被熱あり	
79			7.6	1.8	精良	10YR7/3~同7/1、一部赤変5YR6/6	被熱あり	
80			7.6	1.7	精良	7.5YR7/4~5YR6/4	被熱あり	
81			7.6	1.8	精良	7.5YR8/3~5YR6/4	被熱あり	
82	III S		9.1	2.1	精良	10YR8/2~5YR6/4、一部黒変	被熱あり	
83			9.5	2.9	精良	7.5YR7/4~5YR6/4、黒変部分大	被熱あり	

土壤102 (図13)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
84	土師器	皿Sh	6.4	1.9	精良	2.5Y8/2	朱書きあり	
85		皿N	10.2	2.2	精良	7.5YR7/6		
86	瀬戸	香炉	4.5	2.7	精良	胎土: 2.5Y7/1、釉: 5Y7/2	回転糸切り	
87	白磁	小碗	7.3	2.6	精良	胎土: 2.5Y8/1、釉: 5Y8/1		
88	青磁	碗	11.7	6.3	精良	釉: 2.5GY6/1オリーブ灰色		

土壤04 (図14~18)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
89	土師器	皿Nr	5.0	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
90			5.0	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4		第2層 (炭層)
91			5.1	1.3	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
92			5.1	1.3	精良	胎土: 10YR7/2~7.5YR7/6	内面墨痕あり	第1・2層
93			5.4	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4		第2層 (炭層)
94			5.4	1.4	精良	胎土: 7.5YR7/4~10YR7/3		第2層 (炭層)
95			5.5	1.4	精良	胎土: 10YR7/3、口縁一部: 10YR7/6		第1・2層
96			5.6	1.0	精良	胎土: 10YR7/3		第1・2層
97			5.6	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4、口縁一部黒変		第2層 (炭層)
98			5.6	1.4	良	胎土: 7.5YR7/4		第2層 (炭層)
99			5.6	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4~10YR7/3		第2層 (炭層)
100			5.7	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4、口縁一部: 7.5YR6/6		第2層 (炭層)
101			5.8	1.8	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
102			6.0	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/2、黒変あり		第2層 (炭層)
103			6.7	1.5	精良	胎土: 7.5YR7/4~10YR8/4、 10YR7/6		第1・2層
104			6.7	1.5	良	胎土: 7.5YR7/3~10YR5/1	小石混入	第2層 (炭層)
105			7.0	1.4	精良	胎土: 10YR7/3~10YR7/2		第1・2層
106			7.0	1.4	精良	胎土: 10YR7/4		第2層 (炭層)
107	土師器	皿Sb	9.4	1.9	精良	胎土: 10YR7/2、一部黒変		第1・2層
108			9.5	2.2	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
109			9.6	2.2	不良	胎土: 7.5YR7/4	灯芯痕あり	第1・2層
110			9.7	(1.8)	精良	胎土: 10YR7/2、黒変		第1・2層
111			9.7	1.6	精良	胎土: 10YR7/2~同7/4、黒変		第1・2層
112			9.8	2.0	精良	胎土: 10YR6/2、大半が黒変		第1・2層
113			9.8	2.3	精良	胎土: 7.5YR7/3~同6/3		第1・2層
114			10.2	2.0	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
115			10.2	2.2	精良	胎土: 2.5Y6/2、大半が黒変		第1・2層
116			10.0	2.2	精良	胎土: 7.5YR7/4	灯芯痕あり	第1・2層
117			10.2	2.1	精良	胎土: 2.5Y6/1、大半が黒変		第1・2層
118			10.7	2.3	精良	胎土: 7.5YR7/4~10YR8/3		第1・2層
119			10.7	2.4	精良	胎土: 7.5YR7/4~10YR7/3	灯明皿	第1・2層
120			10.5	2.1	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
121			10.7	2.2	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
122			10.8	2.3	精良	胎土: 7.5YR7/4	灯芯痕あり	第2層 (炭層)
123			10.9	2.4	精良	胎土: 7.5YR7/3~同7/4		第1・2層
124			10.9	2.4	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
125			11.1	2.4	精良	胎土: 7.5YR7/4	灯芯痕あり	第1・2層
126			11.1	2.0	精良	胎土: 7.5YR7/4	灯芯痕あり	第1・2層
127			11.2	2.0	精良	胎土: 10YR7/3~7.5YR7/4、 黒変あり		第1・2層
128			11.7	2.0	精良	胎土: 7.5YR7/4~10YR5/1		第1・2層
129			12.4	2.0	精良	胎土: 7.5YR7/4	灯芯痕あり	第1・2層
130			13.1	2.0	精良	胎土: 7.5YR7/4~同5/1		第1・2層
131			15.8	2.6	精良	胎土: 7.5YR7/4		第1・2層
132	小壺		1.8	2.2	精良	胎土: 10YR8/3		第2層 (炭層)
133			1.9	2.2	精良	胎土: 10YR8/2		第2層 (炭層)
134			2.0	2.7	精良	胎土: 2.5Y8/2、一部10YR7/6		第1・2層
135			2.0	2.2	精良	胎土: 2.5Y8/2~同8/3		第2層 (炭層)
136			2.1	2.4	精良	胎土: 2.5Y7/2、一部7.5YR7/6		第2層 (炭層)
137			2.2	2.4	精良	胎土: 2.5Y8/2、一部10YR7/6		第1・2層
138			2.3	2.4	精良	胎土: 2.5Y8/1~10YR7/4		第1・2層

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
139	土師器	小壺	2.3	2.8	精良	胎土: 2.5Y8/2		第2層 (炭層)
140			2.5	2.2	精良	胎土: 2.5Y8/2		第2層 (炭層)
141		塙壺蓋	6.8	2.2	目が粗い	胎土: 5YR7/6	小石混入	第2層 (炭層)
142			5.4	8.3	精良	胎土: 5YR7/4~同6/6、内面: 2.5YR6/6		第2層 (炭層)
143		壺蓋	5.3	9.0	精良	胎土: 5YR6/6~内面2.5YR6/6		第2層 (炭層)
144			17.8	2.4	精良	胎土: 5YR6/4、器表: 5YR6/4~同5/1		第1層
145		焰焰鍋	30.4	(5.7)	精良	胎土: 5YR8/4~同7/6、 10YR8/3	外面体部~座部ケズリ	第2層 (炭層)
146			28.8	8.7	精良	胎土: 5YR7/4~7.5YR7/4	内外面とも炭素吸着	第2層 (炭層)
147		碗	7.6	3.8	精良	胎土: 2.5Y8/1~8/2、 10YR7/6		第2層 (炭層)
148	土製品	土鉢	-	5.4	精良	胎土: 7.5YR8/4~同7/4	小石混入	第2層 (炭層)
149	瓦器	瓦灯	9.4	6.4	精良	胎土: 10YR7/2~2.5Y4/1、 器表: N3/0暗灰色	蓋つまみ	-
150			-	(6.3)	精良	胎土: 10YR7/2、 器表: N3/0暗灰色		第2層 (炭層)
151	唐津	蓋	8.8	3.3	精良	胎土: 2.5Y6/1、 軸: 7.5Y5/2灰オーブ色、 文様は2.5Y3/1		第2層 (炭層)
152		皿	16.2	4.1	精良	胎土: 10YR7/4~2.5Y5/1、 軸: N7/1灰白色~N6/0灰色、 一部2.5Y6/2		第2層 (炭層)
153		小碗	8.5	4.5	精良	胎土: 7.5YR7/4、 軸: 5YR6/4白濁あり		第1層
154			8.3	4.0	精良	胎土: 7.5YR7/4、 軸: 5YR6/4	底部糸切り	第2層 (炭層)
155		碗	-	(4.8)	精良	胎土: 5YR7/4~2.5Y7/2、 軸: 5Y6/2		第2層 (炭層)
156			13.6	7.1	精良	胎土: N7/0灰白色、 軸: 2.5GY7/1明オリーブ灰色	総軸	第1層
157			11.0	6.9	目が粗い	胎土: 7.5Y5/4~N5/0灰色、 軸: 2.5GY6/1オリーブ灰色~同5/1オリーブ灰色		第2層 (炭層)
158			10.0	6.4	精良	胎土: 10YR7/3~2.5Y6/1、 軸: 7.5Y6/2灰オーブ色、 文様は2.5Y3/1 (鉄軸)		第2層 (炭層)
159			-	-	精良	胎土: 10YR6/3、 軸: 7.5Y5/2灰オーブ	砂目のトチノ裏あり	第2層 (炭層)
160	焼締陶器信楽か	不明	12.0	12.6	精良	胎土: 5YR6/6~N3/0暗灰色、 軸: 5YR4/3 (鉄軸)、 2.5GY6/1オリーブ灰色 (灰軸)	長石粒目立つ	第2層 (炭層)
161	焼締陶器信楽	擂鉢	25.6	15.0	精良	胎土: 2.5YR6/8、 器表2.5YR6/8~5YR4/2	長石粒目立つ	第2層 (炭層)
162	焼締陶器丹波産か	盤	38.1	8.0	精良	胎土: N7/0灰白色、 器表: 7.5YR4/3~5YR7/4 (鉄軸)	体部内面に重ね焼き痕あり	第2層 (炭層)
163	美濃瀬戸系	天目茶碗	10.9	(5.2)	精良	胎土: 2.5Y8/2、 軸: 10YR2/1		第2層 (炭層)
164			11.1	(5.9)	精良	胎土: 10YR8/2、 軸: 5YR4/3~同1.7/1		第2層 (炭層)
165			11.1	7.1	精良	胎土: 2.5Y8/2、 軸: 7.5YR4/3~N1.5/0黒		第2層 (炭層)
166			11.3	(5.1)	精良	胎土: 2.5Y8/2、 軸: 7.5YR4/3~同1.7/1		第2層 (炭層)
167			11.4	7.6	精良	胎土: 2.5Y8/2、 軸: 7.5YR4/3~N1.5/0		第2層 (炭層)
168			11.4	7.0	精良	胎土: 2.5YR8/3、 軸: 5YR4/3~同2/1		第2層 (炭層)
169			11.5	6.9	精良	胎土: 2.5Y8/2、 軸: 5YR4/3~N1.5/0		第2層 (炭層)
170			11.5	6.9	精良	胎土: 2.5Y8/2~7.5YR7/6、 軸: 7.5YR4/3~N1.5/0		第2層 (炭層)
171			11.8	8.0	精良	胎土: 2.5Y8/2、 軸: 5YR4/3~同1.7/1		第2層 (炭層)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
172	美濃瀬戸系	椀	天目茶椀	11.9	7.4	精良	胎土: 2.5Y8/2、釉: 5YR4/4~同2/2	第2層(炭層)
173			-	(4.4)	精良	胎土: 2.5Y8/2、釉: 7.5YR3/3	第2層(炭層)	
174			-	10.8	(7.2)	精良	胎土: 2.5Y7/1~同8/2、釉: 7.5YR4/3	-
175			-	9.8	7.0	精良	胎土: 2.5Y8/3、釉: 7.5YR4/3~同3/2	第2層(炭層)
176			-	11.4	(6.6)	精良	胎土: 2.5Y8/2、釉: 10YR4/2~N1.5/0黒	第2層(炭層)
177			-	11.3	7.2	精良	胎土: 2.5Y8/1、釉: N1.5/0黒~2.5Y5/4	第2層(炭層)
178			-	11.0	7.4	精良	胎土: 2.5Y8/1~8/2、釉: 5Y8/1(長石釉)	高台と高台内は露胎 第2層(炭層)
179			-	10.6	6.6	精良	胎土: 2.5Y8/1、釉: 5Y8/1(長石釉)	総釉 第2層(炭層)
180			-	11.9	(5.4)	精良	胎土: 2.5Y8/2、釉: 5Y8/2	第2層(炭層)
181			-	10.4	6.4	精良	胎土: N8/0灰白色、釉: 7.5Y7/1灰白色~10BG7/1明青灰色	総釉、疊付は露胎 第2層(炭層)
182		白天目茶椀	白天目茶椀	11.6	7.8	精良	胎土: 2.5Y8/2、釉: 2.5GY8/1灰白色(白泥後灰釉か)	第1層
183			-	12.2	7.2	精良	胎土: 2.5Y8/1~同7/1、釉: 7.5Y8/2灰白色(白泥後灰釉)	小石混入 第1層
184		壺	-	(3.0)	精良	胎土: 2.5Y7/3~同6/1、釉: 7.5YR4/4(鉄釉)	第2層(炭層)	
185			-	(5.8)	精良	胎土: N6/0灰色、釉: 7.5YR4/3	底部糸切り 第2層(炭層)	
186		皿	-	11.1	2.4	精良	胎土: 5Y6/1、釉: 5Y7/3~6/3(灰釉)	第2層(炭層)
187			-	9.9	2.0	精良	胎土: 2.5Y8/1、釉: 5Y7/3(灰釉)	-
188			-	14.0	3.6	精良	胎土: 2.5Y8/1~7/1、釉: 5Y7/1(長石釉)	第2層(炭層)
189		擂鉢	9.1	3.9	精良	胎土: 2.5YR6/6、釉: 5YR3/1	底部糸切り 第2層(炭層)	
190		鉢	-	11.2	8.4	精良	胎土: 2.5YR6/6、器表: 5YR4/2~同5/4	底部糸切り 第2層(炭層)
191			-	11.0	7.6	精良	胎土: 5YR6/6~7.5YR7/6、器表: 2.5YR3/1~5YR4/2	底部糸切り 三足 第2層(炭層)
192	染付磁器	碗	-	11.6	5.0	精良	胎土: 10YR8/2、釉白濁あり	第2層(炭層)
193			-	11.6	(3.5)	精良	胎土: N9/0白色	第1・2層
194			-	11.5	(3.4)	精良	胎土: N9/0白色	第1・2層
195			-	15.8	(5.0)	精良	胎土: N9/0白色	第1・2層
196			-	12.2	(5.0)	精良	胎土: 10YR8/1、釉白濁あり	第2層(炭層)
197			-	11.5	(3.7)	精良	胎土: N9/0白色、一部5YR8/4	第2層(炭層)
198			-	11.6	(4.1)	精良	胎土: N9/0白色~7.5YR8/2	第1・2層
199			-	9.9	(2.3)	精良	胎土: N9/0白色	第1・2層
200			-	(2.2)	精良	胎土: N9/0白色	第1層	
201			-	(2.2)	精良	胎土: N9/0白色、一部5YR8/3、釉やや青味がかる	第2層(炭層)	
202		皿	-	26.8	(3.5)	精良	胎土: N7/0灰白色、釉: 5GY7/1明オリーブ灰色	第1・2層
203			-	(3.5)	精良	胎土: N7/0灰白色、5YR7/6、釉: 5GY7/1明オリーブ灰色	第2層(炭層)	
204			鉢	12.8	4.4	精良	胎土: N9/0白色、釉やや青味がかる	第1・2層
205	土器	白磁	小碗	-	(1.2)	精良	胎土: N9/0白色	第1・2層
206			-	13.6	(2.2)	精良	胎土: N9/0白色	第1・2層
207		皿Nr	-	5.2	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4	第3・4層
208			-	5.3	1.3	精良	胎土: 7.5YR7/4	第3・4層
209			-	5.5	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/6~同7/4	第3・4層
210			-	5.5	1.3	精良	胎土: 7.5YR7/4	第3・4層
211			-	5.6	1.2	精良	胎土: 10YR7/3	第3・4層
212			-	5.7	1.4	精良	胎土: 10YR7/4	第3・4層
213			-	5.7	1.2	精良	胎土: 7.5YR7/4	第3・4層
214			-	5.8	1.3	精良	胎土: 7.5YR7/4	第3・4層
215			-	5.8	1.4	精良	胎土: 10YR7/4~同6/1	第3・4層

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
216	III Nr		5.9	1.4	精良	胎土: 7.5YR7/4		第3・4層
217			6.2	1.3	精良	胎土: 10YR7/4		第3・4層
218			6.2	1.4	精良	胎土: 10YR7/4~7.5YR7/4		第3・4層
219			6.2	1.4	精良	胎土: 10YR7/4		第3・4層
220			6.8	1.8	精良	胎土: 10YR8/3~7.5YR7/6	体部切れ 補修痕あり	第3・4層
221			6.8	1.6	精良	胎土: 10YR7/4		第3・4層
222			6.8	1.8	精良	胎土: 10YR7/4		第3・4層
223			7.0	1.6	精良	胎土: 7.5YR7/4		第3・4層
224			7.1	1.6	精良	胎土: 7.5YR7/4		第3・4層
225			7.1	1.8	精良	胎土: 7.5YR7/4		第3・4層
226	III Sb		9.8	2.2	精良	胎土: 2.5Y7/2~10YR7/4, 一部黒灰色		第3・4層
227			9.8	2.2	精良	胎土: 2.5Y7/2~10YR7/3, 外面煤付着		第3・4層
228			9.8	2.2	精良	胎土: 2.5Y6/1~2.5Y2/1	黒変している	第3・4層
229			9.8	(1.7)	良	胎土: 10YR7/2、一部黒変	口縁灯芯痕	第3・4層
230			10.0	2.0	精良	胎土: 2.5Y7/2、黒変部分多し	灯明皿	第3・4層
231			10.2	2.2	精良	胎土: 7.5YR7/3、一部黒変		第3・4層
232			10.4	1.8	精良	胎土: 7.5YR7/3		第3・4層
233			10.8	2.2	精良	胎土: 10YR7/2、黒変部分多し	灯芯痕あり	第3・4層
234			11.0	1.8	精良	胎土: 10YR7/3~同7/2		第3・4層
235			11.0	2.2	良	胎土: 7.5YR7/4	口縁部に炭素 付着→灯芯痕	第3・4層
236	III S		11.0	2.2	精良	胎土: 7.5YR7/4		第3・4層
237			11.0	1.8	精良	胎土: 7.5YR7/3~8/4		第3・4層
238			11.2	2.0	精良	胎土: 7.5YR7/4、表面炭素付着		第3・4層
239			11.4	1.9	精良	胎土: 7.5YR8/4		第3・4層
240			11.4	2.1	精良	胎土: 7.5YR8/4	口縁灯芯痕	第3・4層
241			11.4	1.8	精良	胎土: 2.5Y7/3	灯芯痕あり	第3・4層
242			11.9	2.0	精良	胎土: 10YR8/2~7.5YR7/4, 一部黒変		第3・4層
243			12.8	2.0	精良	胎土: 10YR7/2~同7/3, 一部黒変		第3・4層
244		壇蓋	7.9	2.1	精良	胎土: 7.5YR7/4 (内側: 5YR7/6)		第3層
245			6.7	2.3	精良	胎土: 5YR7/6、炭素付着	灯明皿に転用	第3層
246			6.8	2.2	精良	胎土: 7.5YR7/4~2.5YR7/6		第3層
247			7.1	1.9	精良	胎土: 7.5YR7/4~2.5YR7/6		第3層
248	瓦器	壇蓋	4.8	8.8	良	胎土: 7.5YR7/4 (口縁付近: 2.5YR6/6)		第3層
249			4.9	7.6	目が 粗い	胎土: 7.5YR8/3~5YR7/6、 内面: 2.5YR6/3	小石混入	第3層
250			4.6	8.9	精良	胎土: 7.5YR7/4 (口縁付近: 2.5YR6/6)		第4層
251		焰燈 鍋	31.5	7.8	精良	胎土: 10YR8/4、 器表: 10YR8/4~同3/1 (外面煤付着)		第3層
252		瓦灯	19.6	8.7	精良	胎土: 2.5Y8/1、 外面: N5/0灰色	口縁~体外面 ミガキ、 「九月吉日慶長 拾年甚右衛」	第4層
253	瓦器	瓦灯 蓋つ まみ	9.5	(4.6)	精良	胎土: N4/0灰色~10YR7/2、 器表: N3/0暗灰色		第3層
254			8.8	(4.4)	精良	胎土: N3/0暗灰色~2.5Y8/1、 器表: N3/0暗灰色		第4層
255		香炉	11.0	4.6	精良	胎土: 10YR6/2~N5/0灰色、 器表: N3/0暗灰色		第3層
256		花瓶	-	(8.0)	精良	胎土: 2.5Y7/1、 器表: 2.5Y5/1~N4/0灰色		第3層
257		火鉢	-	13.2	良	胎土: 7.5YR7/4、 器表: N3/0暗灰色	小石混入	第3層
258			35.2	14.0	精良	胎土: 2.5Y7/1、 器表: N3/0暗灰色	外面はミガキ	第4層

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
259	唐津	向付	13.5	6.0	精良	胎土: 7.5YR6/4 (底部) ~ N5/0 灰色、釉: N6/0灰色、 文様は黒色に発色		第3層
260		鉢	16.4	(6.3)	精良	胎土: 2.5Y5/1、 釉: N7/0灰白色		第3層
261			10.7	6.1	精良	胎土: 7.5YR7/2 ~ 2.5Y6/1、 釉: 7.5Y6/2灰オリーブ色		第3層
262		椀	10.7	6.1	精良	胎土: 7.5YR5/3 ~ 7.5YR6/1、 釉: 10Y6/2オリーブ灰色 (灰釉)		第4層
263		-	(3.7)	精良		胎土: 7.5YR7/6、釉: 白濁する		第3層
264	美濃瀬戸系		7.7	1.4	精良	胎土: 10YR8/3 ~ 2.5Y6/1、 釉: 7.5Y7/1灰白色 ~ 同6/2灰オリーブ色		第3層
265		皿	9.1	2.0	精良	胎土: 2.5Y8/2、 釉: 5Y6/3 (灰釉)		第4層
266			12.4	2.9	精良	胎土: 2.5Y8/1、 釉: 7.5Y8/1灰白色 (長石釉)		第3層
267			12.4	3.1	精良	胎土: 2.5Y8/1、 釉: 7.5Y8/1灰白色 (長石釉)		第4層
268		天目茶椀	10.9	6.8	精良	胎土: 2.5Y8/3 ~ 8/2、 釉: 7.5YR4/3 ~ 黒色 (鉄釉)		第3層
269			11.4	7.4	精良	胎土: 10YR8/2 ~ 8/3、 釉: 10YR1.7/1 (鉄釉)		第4層
270		茶椀	11.8	7.1	精良	胎土: 2.5Y8/2、 釉: 5Y8/1 (長石釉)	総釉	第3層
271		鉄釉小椀	7.7	4.0	精良	胎土: N5/0灰色、 釉: 7.5YR3/2 ~ 同3/1 (鉄釉)		第3層
272		壺	8.6	(2.2)	精良	胎土: 2.5Y7/1 ~ 8/1、 釉: 7.5Y6/3オリーブ黄色 (灰釉)		第3層
273			5.0	(6.5)	精良	胎土: 2.5Y8/3 ~ 7.5YR7/4、 釉: 7.5YR4/3 ~ 黒色 (鉄釉)		第4層
274		香炉	13.4	(6.6)	精良	胎土: 2.5Y7/1、 釉: 5Y7/2 ~ 7/3 (灰釉)	内面は露胎、 降下釉あり	第4層
275	染付磁器		10.1	(3.8)	精良	胎土: N9/0白色		第3・4層
276			10.3	(3.4)	精良	胎土: N9/0白色		第4層
277			10.7	(4.0)	精良	胎土: N9/0白色		第3・4層
278			8.5	2.2	精良	胎土: N9/0白色		第3・4層
279			11.3	5.1	精良	胎土: N9/0白色		第3層
280			-	(1.9)	精良	胎土: N9/0白色		第3・4層
281		皿	13.3	3.0	精良	胎土: N9/0白色、 釉やや青味あり		第4層
282		皿	11.0	(2.2)	精良	胎土: N9/0白色		第3・4層
283	白磁	皿	11.4	3.0	精良	胎土: N9/0白色	高台内に呉須で マークあり	第4層

よく使う色相(H.)、明度(V.) / 彩度(C.)記号と土色名の対照表

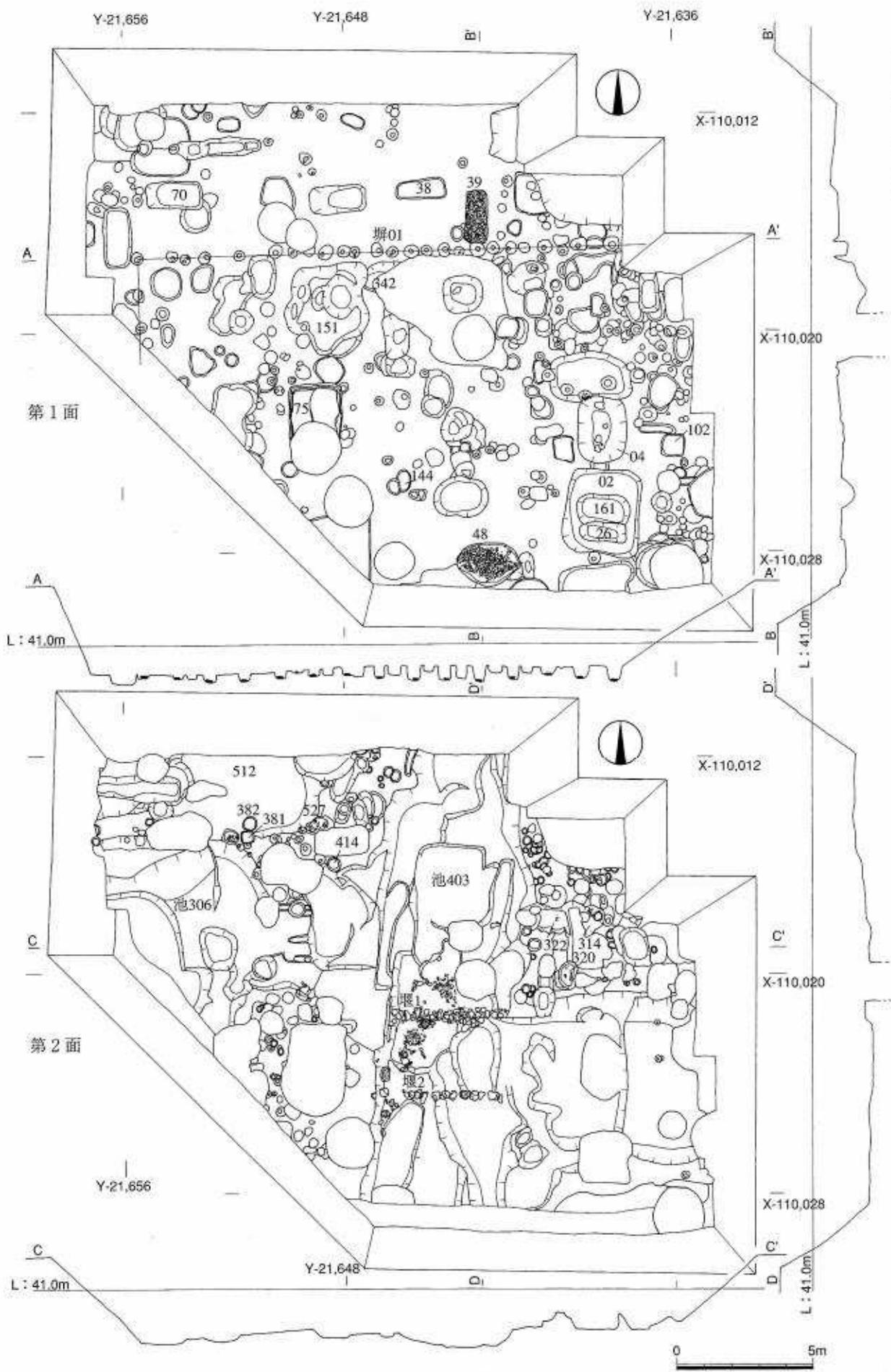
H.V./C.	色名	H.V./C.	色名	H.V./C.	色名	H.V./C.	色名	H.V./C.	色名
7.5YR8/2	灰白色	2.5YR7/6	橙色	7.5YR8/4	5YR5/1	2.5Y5/4	黄褐色		
10YR8/1		2.5YR6/6		10YR8/3	7.5YR6/1	2.5Y6/1			
10YR8/2		5YR7/6		10YR8/4	10YR5/1	2.5Y5/1	黄灰色		
2.5Y8/1		5YR6/6		10YR7/2	5YR4/2	2.5Y4/1			
2.5Y8/2		7.5YR7/6		10YR7/3	10YR7/6	5Y6/3	オリーブ黄色		
2.5Y7/1		5YR8/3	にぶい 橙色	10YR7/4	黄橙色	10YR6/2	明黄褐色	7.5YR3/1	
5Y8/1		2.5YR6/3		10YR6/3	10YR4/2	7.5YR3/2			
5Y8/2		5YR7/4		7.5YR7/2	明褐灰色	10YR3/1	黒褐色		
5Y7/2		5YR6/4		2.5Y8/3	淡黄色	2.5Y3/1			
2.5YR3/1	暗赤灰色	7.5YR7/3		5Y7/3	浅黄色	7.5YR3/3	暗褐色		
5YR5/4	にぶい 赤褐色	7.5YR7/4		2.5Y7/3	灰黄色	7.5YR4/3	褐色		
5YR4/3		2.5Y6/2		7.5YR5/4					
5YR4/4									

*「新版 標準土色範」農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財団法人日本色彩研究会色票監修による

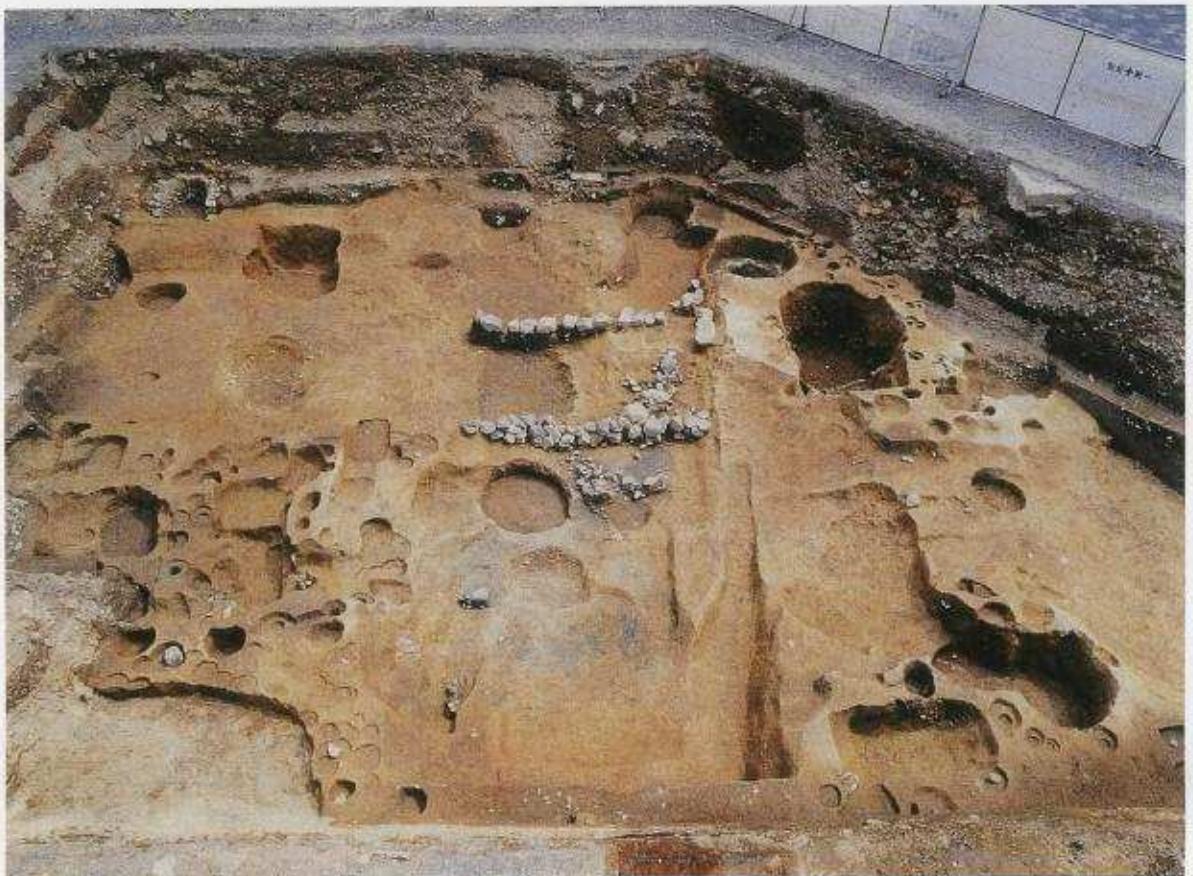
報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうじゅうごちょう							
書名	平安京左京三条三坊十五町							
副書名	ニチコン株式会社本社新築に伴う調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	家崎孝治 上村憲章							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404							
発行年月日	2004年6月1日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号							
平安京左京 三条三坊十 五町跡	京都府中京区 御池通東洞院 西入仲保利町 174番地	26100		35度 02分 29秒	135度 45分 46秒	20030510 ～ 20030910	460m ²	社屋建設
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 三条三坊十 五町跡	都城跡	平安時代 ～江戸時代	土壙、庭園遺構 (池)、堰、溝、 掘立柱跡	土師器、瓦器、 須恵器、輸入 陶磁器、鋳型、 坩堝、天秤具、 軒瓦	「慶長拾年」銘 墨書土器、天秤 具鑄造関連品の 出土。三条坊門 押小路殿関連遺 構確認。			

図 版



第1面・第2面遺構実測図 (1/200)



1 第2面全景（北から）



2 第2面全景（北西から）



1 第1面I期全景（北東から）



2 土壙102（東から）



1 第2面全景（北西から）



2 墓1・2（北から）



1 第1面Ⅱ期全景（北西から）



2 第1面Ⅰ期全景（北東から）



1 調査地遠景（北から）



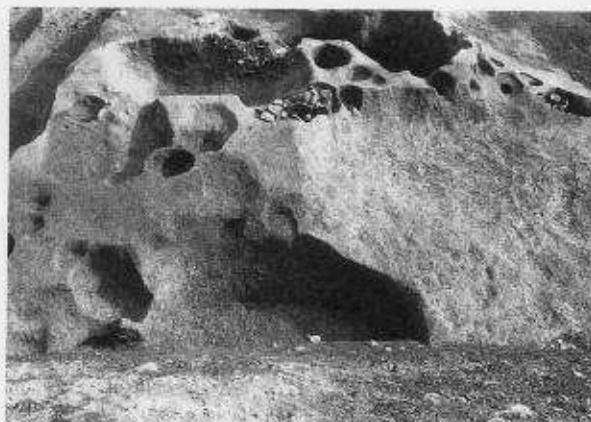
2 池306（北東から）



3 墓1・2（北から）



4 池403北壁断面（南から）



5 北拡張区中央部（北から）



6 北拡張区西部（北から）



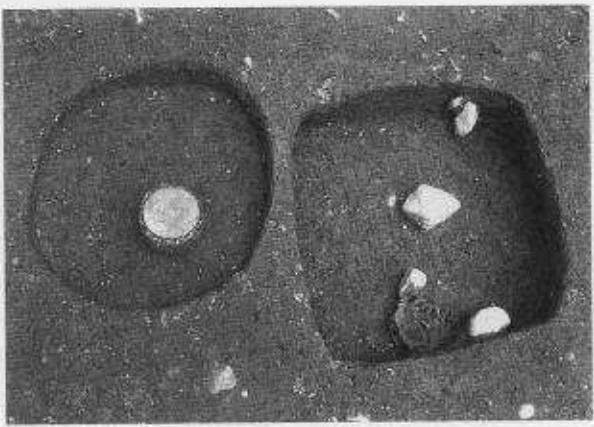
7 土壙527（南から）



8 土壙526（北から）



1 土壌381・382（北東から）



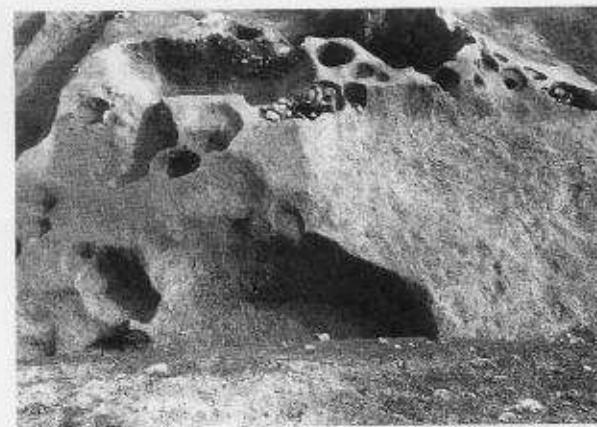
2 土壌382・381（西から）



3 土壌320（東から）



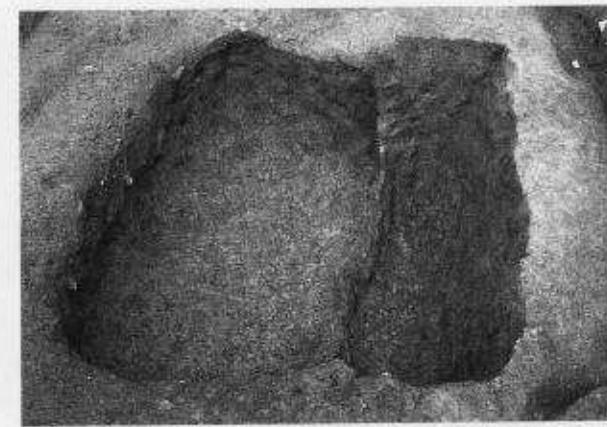
4 土壌314（南西から）



5 土壌414（南から）



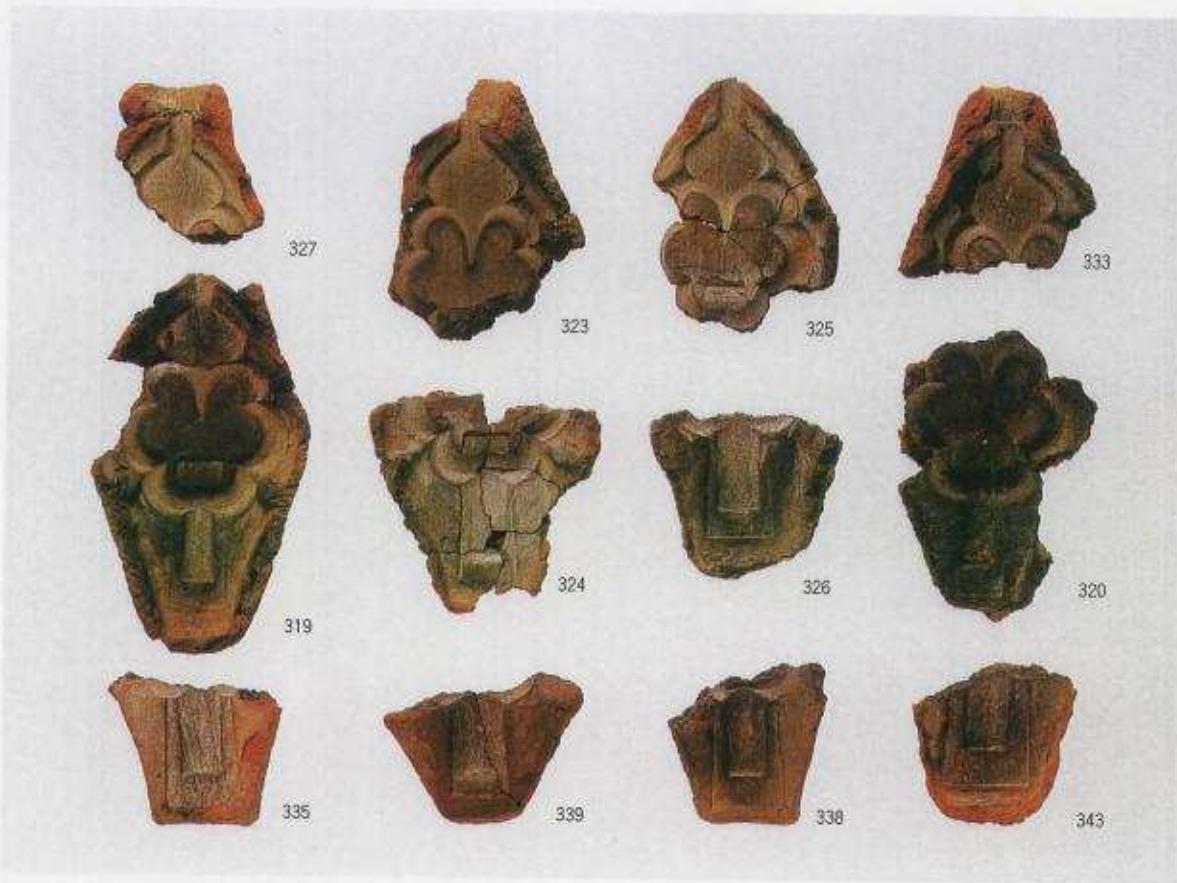
6 土壌02・04・26・102（北東から）



7 土壌02・161・26（西から）



8 柱穴30（南から）



1 木瓜鑄型



2 土壙04出土 「慶長拾年」紀年銘墨書土器



1 土廣04出土 銅製天秤具



2 土廣04出土 天秤皿

308



84



284



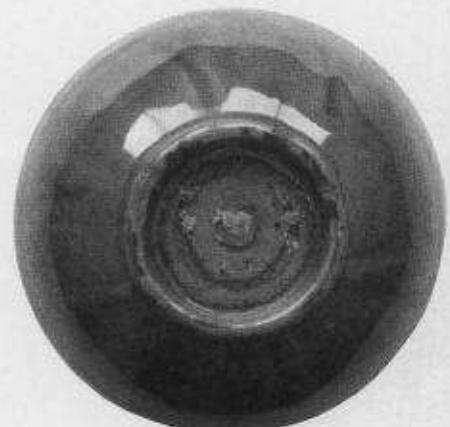
85



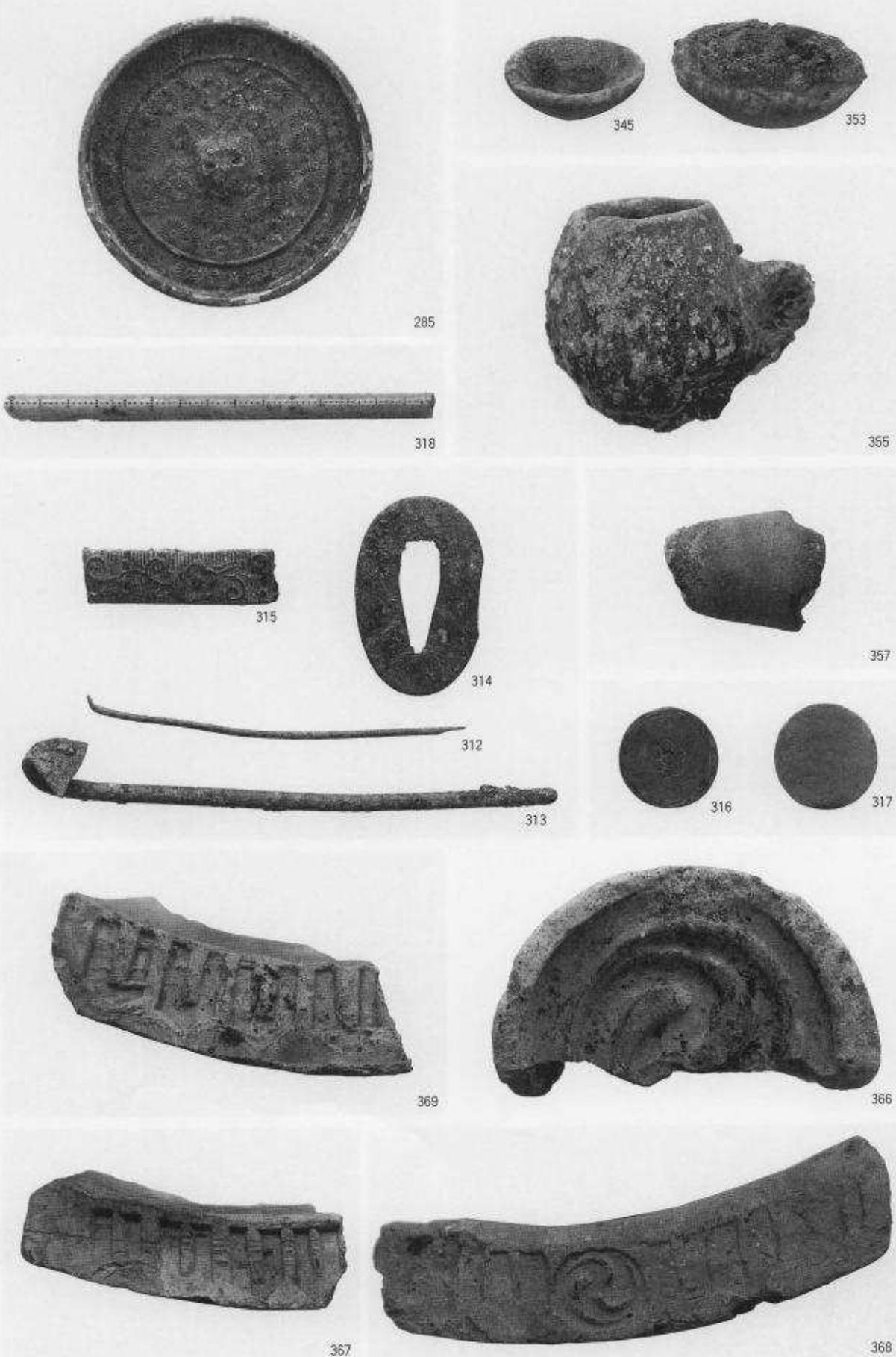
86



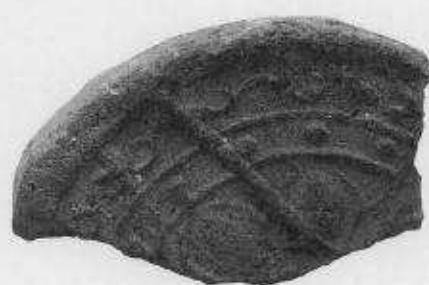
87



88



土壤382（285）・土壤04（312～318、355）・土壤151（345）・土壤342（353）・池306（366～369）出土遺物



359



363



361



364



362



365



370



360

池403（359、360）・池306（361～365、370）出土遺物

平安京左京三条三坊十五町
—ニチコン株式会社本社新築に伴う調査—

発行日 2004年6月1日

編 集 古代文化調査会
発 行

住 所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404
TEL (078)857-6368

印 刷 真 陽 社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034

